

---

# ぼく一人

かわのま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼく一人

### 【Nコード】

N8779X

### 【作者名】

かわのま

### 【あらすじ】

主人公の日常を、ただ主人公が考えるように日記のように記されたもの。人の頭の中は一体全体本当は、どうなっているのだろうと、いろいろを知りたい。

ぼくが住んでいるアパートは駅から自転車で十分ほどの所にあり、なかなかさびれた古いものだった。二階へ上る階段はかなり錆ついでいて、元の色が分からず、一戸一戸の扉は薄い板。

しかし、その隣にとてもきれいな一軒家があった。隣といっても、その家には大きな庭があるため、建物と建物の距離はさほど近くない。それは二階建ての家であり、玄関は二階、庭には様々な花が色合いよく飾られているという、一見も二見もおしゃれなものだった。周りにさびれたアパート以外のものがないので、際立つて素敵な空間である。

その素敵な豪邸には、芹沢さんという夫婦が住んでいた。芹沢さんは、僕より一回りほど年上のとても気のいいお兄さんだ。性格は温厚でいつもぼくには親切にしてくれる。そしてなんととっても格好いい。彼はぼくとは十以上年が離れているにも関わらず、ぼくと並んでいても同世代に見られるほどに若く見える。

彼について特筆すべきことを書いておく。それは彼が何でもできるということだ。それは言葉の通りで、本当に何でもできるのだ。何を得意とするかより、何が不得意なのかと聞くほうが話は早いのだ。いや、不得意というのは違う、正確には彼が知らないだけのことだ。その気になれば何でもできる人なのだ。

本当に何でもできるのか、ぼくは以前に一度彼を試そうとしたことがあった。そのときは、ぼくの隣の部屋に住んでいる亜里沙ちゃん小学五年生をつれて、今亜里沙ちゃんが何を考えているか当ててみてくださいとぼくは言った。すると彼は、いと簡単に当ててしまったのだ。

そのときの様子は、簡単に書くところだ。

「芹沢さん、亜里沙ちゃんは今何を考えていますか？」

亜里沙ちゃんは僕の隣に座ってしゅんとしている。

「フン。この子はな、家に帰ったら食べようと思っていたケーキがなくなっていたから落ち込んでるんだよ」

ぼくは亜里沙ちゃんを見る。彼女もまたぼくを見、小さく頷いた。そして芹沢さんの方を向き、言う。

「お兄ちゃん、どうして分かったの？　すごい！」

そして芹沢さんはこう答える。

「それは俺が世界一の男だからだな」

「……以上です」

ぼくは原稿用紙を机に置き、芹沢さんの方を見る。彼はえらそうにソファにふんぞり返っていた。その顔は満足げだ。

「読心術か、なかなかいいじゃないか」

それを聞いて、ぼくは彼に聞こえないようにため息をついた。すると直後、彼は続けた。

「とでも言つと思つたか？　ええ？　お前それでよく俺の前にやってきたな」

「……最初からいましたけど」

この原稿はここで書かせられたのだ。

「大体な、短いんだよ。俺は十枚書けとிட்டたはずだ」

ぼくは机の上の原稿用紙を見る。それは確かに一枚だ。

「いや、これ以上嘘はつけなくて」

はつきり言つて、この人は何もできない。

「そうだな、嘘だなこれは」

ぼくははつと顔を上げる。この人も自分の性格の悪さを認識していたのか。それなのにぼくにこんなものを書かせて遊んでいるなんて。そう思いぼくの顔にいらつきが出てきたところで、ぼくは彼の隣に座っている彼の妻である君江さんが、にこやかに顔を横に振っ

ているのに気付いた。

「俺はこんな口が悪くない。特に小学生と話すときはとても親切だ」

「はぁ……」僕は諦めて頷く。

「まあ、確かに俺は若く格好いいし、賢いし、歌もうまいし、」  
「そこまで書いていない。」

「なんでもできるけどな」

「そこが一番嘘だった。」

芹沢さんは僕の書いた原稿用紙を手に取り、にやにやし始めた。

「世界一の男か。恒太郎が俺のことをそんな風に思っていたとはな」とか何とか言った。

ぼくはただ、はいはいと頷く。

この原稿の内容、真実が一つあるとすれば、芹沢さんが亜里沙ちゃんの考えていることを当てたというだけだった。まあ、実際は芹沢さん自身がケーキを食べてしまったというのは言うまでもない。

とにかくぼくは作文を書いた。さて、なんでこんなことになったか。いや、別にこれは異例のことではない。僕らはいつもこの調子だった。

罰ゲームだ。テレビゲームをやっている、芹沢さんが罰ゲームを提示したのだった。

「恒太郎が負けたら、俺の紹介文を正直に書け」

「キミエが負けたら、ジュースを買ってきてくれ」

芹沢さんはそこまで言うてゲームを始めた。つまり、彼には自分が負けるという未来は見えていなかったらしい。なんて自信家なのだと思うのは思うのだが、実際、彼には勝ったことがなかった。大して頭がいいわけでもない彼にどうして勝てないのか、これはとても不思議だった。

ぼくは改めてこの夫婦を見る。変だ。明らかに変だ。一言で言うと、彼らはとても幼稚だった。家の中は遊ぶものや、意味のわから

ないもので溢れていたし、とてもきれいだとは言えなかった。格好もとても外に出られるようなものではなかった。しかし実際外で見かけるとき、彼らはとても上品な服装を着ている。そんな服をどこで買ったのか。そもそもそのセンスがあるなら家でも同じ服を着ていればいいのにとぼくは思う。そのことを彼らに言ったところで、暖簾に腕押しである。自分の人生だから人には関係ない。これが彼らの中心にある考えらしい。かく言うぼくも格好については人のこととは言えないのだが。

そして芹沢さんたちは、働いていない。働いたことがあるのか、これは聞いたことがないのだが、今働いていないことは間違いない。というのも、君江さんの実家は金持ち一家なのである。みんながみんな、このダメ夫婦に金を与えているらしいのだからおかしい。ただ、君江さんを見てみると、そんな家族であつてもおかしくないように思えてくる。彼女もさうとう変わつていいるからだ。

「あの、僕そろそろ用事があるので失礼しますね」

僕はさう言つて腰を上げる。その動作を芹沢さんは鋭い視線で受け止める。僕はそれに気付かないふりをして立ち去ろうとした。すると彼が一言、

「なにか面白い話があつたら、すぐにくるように」

それはいつものせりふだった。もう挨拶のようにもなつていた。

「はいはい」

僕はさう言い残して、その家を去つた。

## 2

恒太郎はノートを閉じた。ノートを閉じるという行為自体は数秒で終わる。しかし自分はその行動を認識し、文章として頭に浮かべる。そんな一瞬が、一日のうちに何度もあつた。

やらなくてはいけないことはこれで終わりだったかな。今日は日曜日で、明日の授業は一限と二限と三限。それらに関する宿題はな

いいし、明日締め切りのレポートもない。今日はもうやることがないということだ。

恒太郎は自分の部屋の中をぐるりと見渡し、小さなゲーム機を手にしてベッドに寝転んだ。スイッチを入れる。画面には小さな正方形が並び、それがまた正方形を作り出していた。恒太郎はその四角をどんどん塗りつぶしていく。

ゲームをやっているときは、ゲームに集中できる。これは自分にとっては、理想の状況だった。

今頃芹沢さんは何をしているだろうか。ふと、画面に目をやりつつも違う男のことを考えた。こういうとき想像で出てくる彼の顔はいつも何故か少し格好いい。そして嫌味な笑顔でこちらを向いているのだ。恒太郎はすぐに意識をゲームの画面に戻した。

そしてまた、ゲームに熱中し始めた。

翌朝、起きると枕の上にあつた目覚ましは七時を示していた。いいタイムだ。一瞬気持ちのいい感情が芽生えたが、枕の横に開いたままのゲーム機を見て、ため息をつく。またつけたまま寝てしまったのだ。今月はこれで何回目だろうか。部屋の電気ももちろん、点けたままであった。

小さな自己嫌悪にまみれながら、恒太郎は布団からでる。そのまま冷蔵庫まで行き、コップにお茶を汲んで飲む。風呂場の鏡を見ると、そこに映っているのは紛れもない自分であり、わざと笑顔を作ってみるが、新しい発見は何一つなかった。

歯磨きをし、トーストを焼いて食べた。クローゼットから適当に服を取りだし、着る。いつもの代り映えしない服装だ。あいたままのクローゼットを見やるも、そこには想像しているものはない。

少しくつろいだから家を出る。大学までは自転車で五分程だった。十一月になった今は少し肌寒く、自転車に乗って道を走っていくのがなんだか気持ちがいい。

大学の門をくぐり目的の教室につくと、そこには誰もいなかった。

恒太郎はいつもの席に腰を下ろした。自分はいつも、一番だった。早く来ることには理由はない。しかし、遅く来る理由もないのだった。

一人、また一人と教室に人が入ってくる。恒太郎はすることもなくぼーっと窓の外を見ていた。三階だった。少し汚れた窓越しに見る景色は、何も真新しくなく、それでも木を見たりして時間を過ごす。しばらくすると顔見知りの生徒がやってくる。軽く挨拶をしながら、恒太郎はその人が今何を考えていたかを想像した。いつものように隣の席に座った佐々木は、いつものように眠そうな顔をしている。しかし彼の頭の中はこうだ。

『限界とは何だろう。』

どんな行為でも、想像の中では実行することが容易い。しかし物事には必ずと言っていいほど限界がある。これはとても不思議だ。食べ物をつかみ口に持っていき、飲み込む。それだけの作業をずっと続けられないのはなぜなのだろう。はっきりと覚醒する。そんなことはとても簡単なことのはずなのに今俺はどうしてこんなにも眠いのだ。今にも眠ってしまいそうだ。起きていることはこんなに簡単そうなのに。』

恒太郎は心の中でやつきながら佐々木をもう一度見やった。彼は彼で、いつものようにノートを出しているところだった。

教室は人でいっぱいだった。みんなそれぞれ違うことを考えている。全員が違うこと。これがもし全員が同じことを考えていたら……。また恒太郎は想像してみる。しかし、これはさほど面白くなかった。すぐに考えを捨てる。

そして先生が教室にやってきて、授業が始まった。

場所は、近所の川沿い。ぼくら三人、芹沢夫妻とぼくは仲良く肩を並べて歩いていた。川べりにはシラサギが一羽、静かに立っ

た。この場所ではよくこういう景色を目にすることがあった。

「さつきから思ってたんですけど」

ぼくは左隣りを歩いていたら芹沢さんに話しかける。

「なんだ」

彼はいつにも増して堂々としていた。今日は外であるため、服装はぱっちり決めてある。それはまるでドラマの衣装のようだった。もちろん、君江さんでもある。彼女の方は、着物を着ている。それも上等なもので、一目見ただけで素人のぼくでもその高価さが伝わってきた。

「いやあ、その、腕……に書いてある」

ぼくは芹沢さんの左腕の手首あたりを目で示す。すると彼はにしゃつと笑い、嬉しそうに言った。

「気づいたか。ははは。これは腕時計だ」

「何が腕時計なんですか」

ぼくは呆れて言う。それもそのはず、彼の左腕のは腕時計など巻かれてはいない。そこにあるのは、ある………というのかは分からないが、マジックで書かれた簡素な腕時計だったのだ。油性マジックで、何も見ずに適当に書かれたのであるうそれは、得意げに三時を示していた。おやつの時間か……。

芹沢さんならしかねない変な行いだが、どうしてもぼくは指摘せずにはいられなかった。でなきゃそれは当然のものとして、むしろ本物の腕時計として空間に溶け込んでいたかもしれないのだ。

「どうせならもつとうまく書けばよかったのに」

ぼくは思ったままを口に出す。

「分かってないな、恒太郎は」

そんなぼくを芹沢さんはまた馬鹿にしたような目で見、腕をぶんぶん振る。

「これでいいんだよ。これでこそいい味が出るからな」

返す言葉もなかった。しかしぼくはもう一つ気づいてしまう。それは君江さんの、右手だった。そこには、太さは違うものの、デザ

インは全く同じ、腕時計が書かれていたのだった。

腕時計は腕に描くものではない。巻くものだ。

心の中で指摘するも、この夫婦には何を言っても無駄だということとは分かり切っていたし、正直なところぼくも内心どこかでは面白がっていたので、それ以上突っ込まなかった。

呆れた顔で芹沢さんを見ていたら、彼が突然目を剥いた。そして立ち止まった。何かの演出なのか、ぼくは身構える。が、彼は数秒間動かないままであった。

彼の目線の先、そこには橋があった。石橋。そこを通過していく車は上半分だけが見えている。そんな、いつもの橋だった。

「芹沢さん？」

ぼくが彼の顔の前で手をひらひらさせると彼は目をぱちぱちさせてぼくに焦点を合わせた。

「どうかしました？」

「ああ。どうかしたよ。今、ものすごい発見を、したっ！」

子供みみたいな声を出してはしゃぐ芹沢さん。そんな芹沢さんを愛おしそうに見つめる君江さん。

「久しぶりに仕事でもするか！」

彼は勢いよくそう言うと、百八十度くると方向転換してきた道に戻っていく。ぼくは慌ててその背中を追いかけて聞いた。

「仕事って？」

すると彼は顔だけをこちらに向けてはつきりところ言ったのだった。

「映画に決まってるんだろ！」

4

昼食時、大学構内のコンビニでサンドウィッチを買い、教室でそれを食べる。コンビニにはその狭い範囲に入りきれない人数の生徒が集まっており、たかがサンドウィッチ一つを買いに十分かかっ

た。それは、十二時に授業が終わり、皆が一斉に昼食を買いに来るからであった。

「お前またそんなけぼっち？」学食で売っている弁当を買って食べている佐々木は恒太郎に言った。「足りんの？」

「足りない。でもこれ以上は食べられない」

実際、恒太郎はすぐにお腹が減る。しかし、一回に食べる量は少ないのだった。これを恒太郎は「ねこたべ」と呼んでいた。

場所は次の授業の教室だった。周りには同じクラスの生徒らしき人たちがちらほら席について昼食をとっていた。とても騒がしく、しかしそれが自然であるために誰も騒がしいことに気づかない。

一時になる。恒太郎は腕時計の針を眺めていた。先生は一時二分にやってきた。彼の研究室はここからそう遠くはない。きっと一時に部屋を出ているのだろう。

先生が黒板に字を書く。恒太郎は彼の声を耳に入れ、内容を理解しようとして、毎分ごとくらいに決意しなおす。集中という字を頭に描く。本当に面白い授業はこんなことをしなくても時間も忘れてしまいうのだが、今日は多少の眠気も手伝ってか、なかなか授業に集中できなかつた。

先生の腕を見る。正確には指を。チョークを持つ指先。動かした後にはチョークの白い粉で書かれた字が現れる。恒太郎は想像する。その線が、まっすぐに伸びるところ。そしてそれは長方形を描く、その中には人の顔と吹き出し。人物の顔はとても丁寧で表情豊かで、漫画家であるかのように上手い。それが黒板いっぱい広がる。

耳から目から受け入れられる現実と、その想像のミスマッチさに内心にやりとしながらも、虚しく先生の厳しい顔を見る。吹き出しの中のセリフは何がいいだろうか。

「テトラヒドロフラン」

先生の声。

恒太郎はノートにそのカタカナを書いてみる。それはT H Fと略される物質だった。しかしカタカナを見ると、途中までは何かの生

き物の名前みたいだ。平仮名にすると、とらひどろふらん、どうもつかみどころがない。

HとOHをノートに書く。それらは物質から水として出てくるらしい。恒太郎はHの上に小さく橋本と書き、OHの上には大水と書いた。ハシモトとオーミズ。その二人は分子から出てくる。そして二人で、水になるのだった。オーミズは最初から水なのに。恒太郎はまた、心の中でにやりとする。そしてまた虚しくなった。

5

晴れた日。気温もそう低くはなかった。少しだけ暑さを感じていたが、ぼくは仕方なく買い物に出かけていた。アパートからは自転車で十五分程の、大きなショッピングセンターだった。駐車場にはたくさん車が止められており、どれもみな似たような形だった。色は、白か黒あるいはシルバー、時々ピンク。お、青もあるな。

ぼくは今晚のメニューを考えながら自転車を駐輪場に止め、店の中に入る。それはとても大きな店だったが、ぼくが用事のあるのは食料品売り場だけだ。だのにぼくは敷地に入って一番近い駐輪場に止めたため、食料品売り場までは少しだけ歩かなくてはいけなかった。

男、男、女、子供。たくさんの方がいる。数えていたらすぐに百人を超すんだろな。でも、百人を超してもとくに何もないのでから、意味はないな。ぼくはまたそんなことを考えながら食料品売り場に向かっていった。

カゴをとり、その中に品物を入れていく。芋、キャベツ、ニラ、たら、ナス、サケ。サケは、鮭ではなく、酒。ぼくはなんの考えもなしにほしいものをどんどんカゴの中に入れていった。そしてすぐにレジに向かった。悩むと長いのは分かっていたので、適当で大丈夫だと思ひ込むことにした。

レジがすみ、商品を袋に入れ終え、また少し歩いて元の出口から

出た時だった。一人の男がぼくの方に歩いてきていた。見るからに軽そうなの男は、似合いもしない柄のストールを首に巻き、いやな笑いを顔に浮かべていた。

目があった。しかしぼくはそのまま自転車の方に歩いていく。

「ねえ君」

声は明らかにぼくに向いていた。仕方なしにぼくは男の方を向いた。男の目は、細く、口角はいやらしく上がっている。

ぼくが何も言わずにいると、男はさらに近づいてくる。やがてぼくとのわずかに一メートルほどになってしまう。

「一人で買物きたの？ 疲れてない？ コーヒーでもおごるけど」  
力ではかなわないか。ぼくは相手のがっしりとした体格を残念そうに見やる。仕方ない、丁寧に断るか。

そのときだった。

「ユカ！」

一人の女子がぼくらの方に駆けてきた。ぼくとそう変わらない年齢、髪の毛の長い、目はきれいに開いていて、唇の薄い、きれいかわいいかで言ったら、きれいな方の女の人がぼくらを見て、いや、明らかにぼくの方を見て、「ユカ、待った？」と言った。

ぼくはどうもユカらしい。

見ると彼女はきれいな瞳に笑顔をのせてぼくを見ている。しかしその目には、ぼくに話しかけていた男への嫌悪もうかがえる。

「うっん。あ、いや、遅かったから先に買い物しちゃった」

ぼくはせいぜいかわいく聞こえる声で言っつて、彼女に笑顔を返す。笑顔には自信があった。

ぼくらのやりとりを、男はさらににやにやした顔で見ている。しかし彼女の方はというと、「じゃあいこっか」と言っつて、その場にはぼくと彼女しかいないのよにふるまってぼくを出口へと誘導した。その、あまりにも自然な動きと、有無を言わさない流れにぼくはただ従い、男は何が起きているのか分からないようにしてその場に立ったままだったが、「あ、おいちよっと！」と言っつ声を背中に

受けた。

けれども彼女はぐんぐん進んだ。

やがて二人は出口に到達する。すると彼女はこちらを見て、先ほどの笑顔はどこに行ったのだろうかという顔でぼくに言った。

「礼」

「レイ？」聞き返すぼく。

「礼の一つでも言いましょうよ」

きれいな睫毛を何度か上下させて彼女は話す。

「あ、ああ。ありがとう」

ぼくは思わず地声でそう言った。すると彼女は一瞬不可解な顔をしたが、そのまま踵を返して店の方へ行ってしまった。

ぼくはユカじゃなくなった。

6

耳からイヤホンをはずす。玄関の鍵はいつもリュックの前のポケットに入れてあった。それを探り探りしてついにつかみ、恒太郎はドアを開ける。ドアを開ける前にイヤホンを外すのは、なんとなくの習慣だった。

電気を点け、着替える。簡単に夕飯を作り、食べた。うどん。うどんを半人前食べた。どうせすぐに腹が減るだろう。そのときは買っておいたパンでも食べよう。

机の上にレポートを広げる。今日出た宿題だった。期限は一週間。まだ大分余裕がある。いつやるのか。恒太郎は問題を見、レポート用紙を閉じた。

テレビを点ける。しかし画面は真っ暗だ。最後に見たのもDVDなのだろう。恒太郎は今さつき購入したばかりのDVDをデッキに入れ、再生を押す。そして画面が真っ黒から変わった瞬間に一時停止ボタンを押した。

静かに息を吐く。一人暮らしなので、その音はわずかに響く。

勢いよく立ちあがるか。ゆっくりと寝転ぶか。頭も右に九十度、左に九十度ゆっくりと振りながら考える。そしてちよつとだけ寝転んでみる。しかしすぐに立ち上がって、風呂の準備をする。準備といても、毎日来ている服を、毎日放置する場所からとってくるだけだ。恒太郎はそのまま、好きではない風呂に入った。

風呂から出ると、冷蔵庫からひとかけら氷を取り出して口に含む。水の味がする。

テレビを点ける。そしてそのままリモコンの再生ボタンを押す。

少しの機械音の後に画面が動き出す。恒太郎は布団の近くの座イスに腰掛け、テレビに見入る。それはある劇団の演劇のDVDだった。二時間、恒太郎は集中してそれを見る。それが恒太郎の唯一の自分らしいと感じられる時間だった。そこには才能が映っている。それを見るのはわくわくするが、同時にとても虚しくもあつた。

その劇団は、役者が十人ほどで構成されている。それぞれが素晴らしい才能の持ち主である。この劇団のどの作品においても役者は魅力的だった。彼らには他の人間にはないものが備わっている。恒太郎は彼らの動作を見るたびに、声を聞くたびに思った。自分とは違う種類の人間なのだ。

自分にはなにもない。それを恥じて何かをする力もない。ただ毎日ゆっくりと、とてもゆっくりと時間を過ごしているだけだ。

虚しい。

しかし恒太郎はDVDを見るのをやめない。それは、それを見る自分が自分らしさの形成になるからだ。彼らに惹かれている、自分やがてそれらの声は、なくてはならないものから、聞きたくないものになるかもしれない。しかし、そうなるまでは毎日でもこうしていたいと思う。

自分も何かをしなくては。そう何度も思ったことがある。しかし、それもまた虚しさにつながる。何かで木を紛らわせなくてはいけない。結果、分からないことが増えるだけで、日常に変化は一つもなかった。

画面を見ている。

恒太郎はただ、画面の中のストーリーに夢中になるように心掛けた。

7

ぼくは異様なものを見た。

自分を映画監督だと言い張った芹沢さんに呼ばれ、ぼくは彼の家を訪れていた。庭に入ると、相変わらず意味のわからないものが落ちていた。いや、きつと落ちていたのではなく置いてあるのだろうけど。手作りの地蔵。手作りの招き猫。しかも一目見ただけで気がめいるような作品なのだった。

玄関のドアに手をかける。しかしそれは動かなかった。いつもは鍵などかけたことがないのに、今日はどうしたのだろう。しかも、人を呼んでおいて……。

怪しみながらもぼくはチャイムを押す。するとどうだろう、二秒もしないうちに扉は開かれた。まるでチャイムがなるのをすぐそばで待っていたかのようなスピードだった。

「せり……」

名前を呼び掛けたぼくは固まった。そこにいたのは確かに芹沢さんなのだが、様子がいつもと違っていた。完璧に無表情の彼が、顔から下を手を持った布で隠した姿。その布は壁の色と同じだった。

「何の真似ですか？」

顔だけの芹沢さんにぼくはとりあえず聞いた。また何か新しい遊びなのだろうなと思いつながらも。

「そう言えばこの間何か発見をしたって言ってましたもんね。それですか」

ぼくはちゃんとした返事を期待せずに言った。芹沢さんとはというと、やはり返事はせずに道をあける。ぼくは中に入った。

いつものリビングはしかし、これまた一面壁と同じ色の布で覆わ

れていた。見るもの見るものにそれをかぶせているので、壁の色、少し濁った白色以外の色は、ぼく以外には芹沢さんの顔くらいだった。

芹沢さんは無表情ながらも、顔というか頭をアピールしている。「それって、顔を浮かせているつもりですか？」

とは流石に聞かなかった。彼は楽しんでいるのだ。顔は無表情だけど、長い付き合いの僕には分かりすぎるほど分かった。

芹沢さんはぼくをソファに座らせた。そして自分も隣に座り、正面の壁を指した。そこはそこで、変なつくりになっていた。

これまた壁の色と同色の細い板が、斜めに固定されていた。二十×二メートルくらいかな。それも五本はある。それらはこちらに向けて固定されている。縦に平行していて、それぞれの間は三十七センチほどだった。ぼくはまだ意味が分からず、芹沢さんを見るが、彼は何も言わない。ただ、無表情が疲れたのかわくわくを隠しきれないのか、表情には多少の変化はうかがえた。

静かに音がして、正面右にあるドアが開いた。そこには芹沢さんのように顔から下を布で隠した君江さんがいた。彼女も一応、顔だけが浮いている仕様になっているのだ。ぼくはだんだん主旨がつかめてきた。

要するに芹沢さんは、この間の川沿いの橋で、橋の側面から人の顔だけが出ている景色を想像しのだろう。自転車であれば、それはすごいスピードである。顔だけがすごいスピードで移動していく。それは確かに面白かった。しかしぼくは内心だけでにやりとし、品定めするように君江さんを見た。

君江さんはまず、五本の板の一番上のさらに上に移動し、まるで顔がその板に乗っているかのようにした。そして、その移動が終わると、ぼくの横に座っている芹沢さんが指を鳴らした。すると、君江さんの顔はそこからどんどん下っていく。斜めに固定された板の上を顔だけが滑って行くように。それはよくある、階段を下りるのにエスカレーターに乗っていると見せかけるといふ動作に似ていた。

一本目の板の端まで来ると、彼女はまた下にある板の端に顔を移動させる。その際、きりりとした表情のまま顔を左向きから右向きへ変えた。

これはなかなか面白かった。ぼくはひそかに感心しながらも、何もしないでそれを見る。布にしる、板にしる、全体を一つの色に見せようという技術はそう高くない。しかし、彼と彼女の演出と技術力はなかなか目を見張るものがあった。

くだらないけど、面白い。

やがて君江さんは腰をかがめながら最後の板の端までたどり着いた。最後には床に落ちるおまけまでつけていた。ぼくは拍手する。

芹沢さんは、まだまだよ、と言って君江さんもソファに座らせて自分は何かの準備に取り掛かった。いままで板のあった位置に、布をはり、簡単なスクリーンを用意したのだった。そしていつ買ったのか、後ろに用意していたプロジェクターのスイッチを入れる。そしてまた指を鳴らすと、今度は映像が流れてくる。これが、映画なのか。ぼくはやっと気付いた。今日は、映画を見るためにぼくは呼ばれたのだ。

題名はない。すぐにそれはスクリーンに映し出された。顔。

君江さんの顔である。

完璧に顔のみである。さっきまでの君江さんには、髪の毛があった。つまり、頭部だったわけだが、今スクリーンに映っているのは顔のみである。おそらく白い布の一部分を丸くくりぬいたのだろう。そこい顔をはめているのだ。

その顔は、やはり無表情だった。

君江さんの顔は、奥へ進んだり、手前へ来たり、左右に動いたりする。やがて画面の中には木や花が映るようになる。色が増えて画面は一気に見やすくなり、それぞれが映えた。

リズムカルに映像は進んでいく。今度は君江さんの顔は動かずに周りの景色が動いていく。最初はゆっくりだったが、それは次第に

速くなっていく。君江さんの髪が風でそよいでいる。これはきつと扇風機か、それかドライヤーか。

君江さんの表情が崩れたのは始まって五分ほどしたところだった。顔は画面の右により、左を向き、何かを待っている。少し不安そうにも見える。予想通り、右からも一つの顔が現れた。そう、芹沢さんの顔が。

やっと現れたか。

そして、しゃべる。

「まあなんてかわいらしいんだ、君は」

「先ほどここに来るまでの道で髪飾りを落としてしまったの。探してくださる？」

話は噛み合っていないが、それぞれが堂々としていて、声は通っていた。

しかし、映像はそこで途切れた。芹沢さんも立ち上がり、スクリーンを元あったところへしまう。

「まだできてないんだよ」ぼくが聞く前に彼は言う。

「そうですか」

「でも、無性に見せたくてね」ふふふふ、ははははと笑う。もう無表情はどこかへ消えていた。とにかくほめられたくて仕方がない、そんな顔だった。

「面白かったですよ」

ぼくは思った通りのことを言う。

「なかなか斬新で、楽しかったです」

聞くと芹沢さんは嬉しそうに笑う。この人の笑う顔がぼくは好きだった。

「完成したらまた見せてください」

「ああ。もちろん。それまで飽きずに完成させられたらの話だがな」ははははは、と。

なるほど。それはそうである。

ピクロスの画面から視線をはずす。窓の外を見るともう外は明るかった。今日は、寝たのだろうか。記憶にない。しかし、記憶にないということは寝たのだろうか。恒太郎は仰向けに寝転びなおす。

今日の授業は四限のみ。家を出なくてはいけない時間まではまだ六時間以上あった。何をしようか。ああ、そうか、今日はごみの日だ。ごみを出さなくては……。壁に掛けてある時計を見る。なんとか間に合いそうな時間だった。先週も間に合わなくて出せなかった、今週は出しておかないと。

ぼくは勢いづけて立ち上がり、用意をする。そして服装はそのままで玄関をでた。時刻は八時だった。

少しひんやりとする空気に触れて、気持ちがよくなる。息を意識して、アパートの階段を降りた。ごみをごみ置き場に置くと、すぐそばを人が通った。それはアパートの斜め向かいに住んでいるおばあさんだった。顔はいかにも意地悪そうな、七十くらいの人だ。

恒太郎はこの人が嫌いだった。何を知っているわけでもない、でも何となく、嫌いだった。

すぐに部屋に戻る。そして手を洗って再び布団に寝転んだ。しかしまだ、おばあさんの顔が頭から離れない。あの顔は、何を考えている顔なのだろうか。

『私以外の人間は、きっと何もできない』  
違うだろうか。

『井上恒太郎は、何もできないへっぽこ人間だ』

なんだろうそれは。考えながら苦笑する。大体、あの人は恒太郎の名前を知らないだろうに。それに、へっぽこって。

自分が持っている劣等感を意識することはほとんどない。人と関わって気づくくらいだ。現に今も、恒太郎は気付いていないのだった。

「芹沢さんの映画面白かったなあ」

恒太郎は声に出して言ってみた。しかしその声は自分にしか届かない。

あと、六時間。何をして過ごそうか。

あと、六時間。

考えた挙句、結局またゲーム機に手を伸ばす。そこには、正方形の集まりがたくさんいた。規則正しく、並んでいる。並ぶことが仕事だったりしたらどうだろう。恒太郎はふと考えてみる。

職業、並び屋。

今日は一列に並ぶ。時給六百円。

今日は斜めに並び、真中で交差する。時給六百五十円。

今日は遠くから見てチェック模様になるように並ぶ。時給八百円。

これはいまいちか。恒太郎は、意識をゲームに戻す。

しかし、頭の中はまだ、並び屋の面々が占めていた。

9

ぼくはまたあの女の人にあつた。ぼくがユカであるための、あの女の人。

ぼくはまた最初に彼女を見たときと同じショッピングセンターに買い物に来ていた。福引の残念賞でもらったエコバックに買ったものを入れながら、他に何か買う予定のものがなかったかを考えていた。

そうだ、A4のファイルがほしかったんだ。

思い出すとすぐに百円均一の店に向かう。それは二階にあつた。目的のものはすぐに見つかり、レジに向かう。代金は百五十円だった。レジの人は男の人で、少し無愛想である。

そしてぼくは階段を降り、出口に向かった。そこで彼女を見かけたのだつた。出口の近くの店の中で品物を見ていた。手には商品を持っている。それはじょうろだった。

彼女は黒いチェックのワンピースにジーパンをはいている。身長

が高いし、とてもスタイルがよかった。ぼくは彼女に気づき、しかしそのまま出口へ行こうとしていると、やがて向こうがこちらに気付いた。

あ、この間の。

声には出していないものの、彼女の表情から読み取ったのはそういうセリフ。ぼくはぼくで、表情で返事をする。

この間はどうもありがとう。

口角をあげて彼女を見る。すると彼女はどうしたことが、実際に声をだしてぼくを呼んだ。

「ユカちゃん、今日もお買いもの？」

ぼくは自分がユカであることをすばやく認識し、

「うん。そう」

と答える。考えすぎた後の答えは、なんともそっけないものになってしまった。

「え」

途端に彼女が不思議さそうな顔をする。

どうした？

「え、男？」

それを聞いてぼくは目をぱちぱちさせる。

とりあえず彼女の近くにより、知り合いと話をしているという環境を整えた。

「うん」

ぼくはなるべく男っぽい声で答える。声で気付くなら、なぜこの間は気付かなかったのだろう。いや、気づきかけていたか。

「本当に？ そんなかわいい顔して？」

言っと彼女はぼくを足の先から頭の先まで見た。スカートにカーディガン。今日は特に好きな服を着ていた。ぼくは内心、彼女にまた会えたのが今日でよかったと思った。

「そうだよ。恒太郎って言う」

「へえ。ユカじゃないんだ」

「いや、ユカでいい」

ぼくはユカという名前が気に入っていたのだった。

「ふーん。まあ、何でもいいけど。私は千博。女です」

どう見ても女っぽい美しい彼女は、笑みを含みながらそう言った。ぼくらは何故か自然にお茶を飲むことにした。そこで自分たちのいろいろな話をした。彼女は近くの大学に通っており、ときたまここに買い物にくるらしい。まるでぼくと同じだった。

話していても気付いたのであるが、千博はとても、できた人間だった。初対面のときにぼくを助けた彼女は、きつといつもそうやっていろんな人の助けをしているのだろう。話していて、ぼくはその立派さに若干気負わされていた。と同時に、何でもうまくいくような彼女がうらやましく、魅力的でもあった。

話もとても面白く、退屈することがなかった。ぼくらはいつの間にか二時間ほどしゃべりっぱなしだったのだ。頼んだ飲み物はとっくになくなっており、二杯目を頼むことなく居座っていた。

「ユカは、話がうまいね」

突然千博がそんなことを言い出す。ぼくはそれこそ信じられなくて彼女を見返す。しかし、その顔は冗談を言っている顔ではなかった。

「うっそだー」

「いやいや本当」

千博は真剣な顔を崩さない。ぼくはぼくで、ほめられて悪い気はせず、なんにせよ嬉しかった。ぼくの話面白く思ってくれる人がここにいるのだという気持ち胸一杯に広がり、やがて気分がすごくよくなってきた。

「また、話そうよ」

千博はそう言って、伝票を自分の方へと引き寄せた。

「うん」

ぼくはそれを黙って食い止め、席を立った。

浴槽のふたに顎を置いて考え事をしていた。斜め前にある鏡には恒太郎の顔は映っていない。

顎が痛くなってきたので、ふたから話した。触ってみると、痕がついている。ため息。

風呂に入っている。風呂に入っている。そう、頭で繰り返した。テレビの画面の下に流れるテロップのように頭の中にそれを流し、そして映像は、自分がふたに顎を置いているところ。テロップの字は白色だった。音はない。

何時くらいだろうか。少しお腹がすいたな。風呂から出たら何か食べようか。

そして恒太郎は風呂から出た自分がまず氷を口に入れるのだろうと想像し、浴槽から出る。しかし、その予想は外れることになる。的中率百パーセントのはずだったのに。

電話の音がしていたのだ。身体を拭き、服を着ているときに電話が鳴りだした。いや、実際には鳴ったのではない。携帯の振動音だ。机の上に置いてあった携帯電話は、大げさなほどに振動していた。

『おっ』

受話ボタンを押すと、恒太郎が言葉を発する間もなく聞き覚えのある声がした。それは兄だった。

「ああ」

『今、大丈夫か？』

「大丈夫」

言いながら恒太郎は冷蔵庫を開け、氷を口に放り込んだ。水の味がする。

『あのなあ、お前、あの二人組のCD持ってたよな？』

兄、幸仁は明るい声でそんなことを言った。あの二人組、に関して恒太郎の頭には「？」が浮かぶことは一瞬もなく、すぐにそれがどのアーティストであるのか分かった。

「持つてるよ」

『貸してほしいんだけど』

「どれ？」

『どれでもいいんだけど』

「そう、じゃあダビングするよ」

単に、自分のものが部屋から出ていくのが嫌なだけである。しかし幸仁はそんな気持ちにはきつと気付かない。こいつは恒太郎のことをどこまで知っているか。特に期待をしているわけではないが、これが家族かと思うことはある。

『そうか？ ありがとう』

案の定兄は感謝の気持ちを述べた。

『ああそうそう。じいちゃんたちがたまには顔出せって言ってたぜ』  
「うん。出すよ」

もし何もすることがなかったら、今週帰ってもいい。実家は、ここから電車で二時間ほどの場所で、行こうと思えばいつでも行けるのだった。

兄はそれだけ言うと言話を切った。恒太郎は切れた電話をすぐに閉じ、再び机に乗せた。きつと今日はもう震えることはないだろう。DVDデッキの電源を入れ、テレビを点けようとリモコンに手を伸ばす。が、その手はリモコンを触る前に握られた。輝く人間を見る気分ではなかった。言葉にするとそうなるが、なんだかそれも的確な表現ではないように思える。恒太郎はただ、何もせずに座っていたいと思っていた。

大声を出してみたい。きつと楽しいだろうな。

大量の髪を切ってみたい。きつと楽しいだろう。

しかし、そんなことは本当はいつでも、どこでもできることで、日常であり、ありふれている。やっていないと思っただけで、日常とはそれと大して変わらないのだ。

つまり、きつと楽しいというのは間違っているのだろう。実際、やってみればその気持ちはきつと、

「何をいまさら」なのだろう。

近くにあつた本を開く。それはレポートを書くために借りてきた本だった。そこには専門知識がひたすら書かれている。書かれているという事は、書いた人がいるということだ。印刷した人もいる。自分の前に、この本を読んだ人がいる、つまり触った人がいる。たった一冊の本に、何人の人間がかかわってきたのだろうか。

字を追った。そこには百年も前に現在有名である式を考えた人物の名前が載っていた。そうか、こういう関わり方もあるのだな。この人物は、自分の名前、知識がこの本に載っていることは知らない。そこにもまた、一人の人間のすごさが感じられ、悲しくなった。何かをしなくてはならない。恒太郎はただ焦ったが、それが無駄であることも分かっていた。

本を読み進めた。課題をやろう。何かに集中しよう。そうすればいいのだ。

しかし、結局その本の内容は頭に入らず、恒太郎は本人が言う無駄な時間を過ごすことになってしまったのだった。

11

化粧はしたことがない。だけどぼくはよく女の子に間違えられた。女の格好をしているのは別に自分が女だと思っているわけでも、男が好きなわけでもなかった。ただスカートをはこうとおもっただけで、ただブーツが履きたいだけなのだった。

そんなぼくは今、女子の入るセレクトショップにいる。店内にはいろいろな服が並べられている。どれもセンスが良く、ぼくも購買意欲をそそられていた。

こういふ店にくるのはもちろん初めてではない。持っている服はこういふ店で買ったのだ。その時は一言も言葉を発さない。ただ黙々とレジを終える。もちろん、一人である。

しかし、今日は違った。それらのことがひとつひとついつもと違

うのである。

「これとこれどっちがいいかね」

「ぼくだったら左だね」

一人じゃないうえに、言葉を発している。

「うん。じゃあ、この左の方がいい理由を述べよ」

千博は真剣な顔で服の方を見ながら言った。

ぼくは断然左だった。彼女が持っているのは、チエック柄のキュロットで、左は茶色、右が紫だった。紫が嫌いなわけではない。ただ、横にいるマネキンが茶色の方を着ていて、それがとても似合っているのだった。ぼくはそういうのに流されやすい。

ちらつとマネキンを見る彼女。

「もっている服に合わせやすいんじゃない？ 茶色の方が」

「……」

彼女は頭の中で一人会話をしているのだろう。「買う？」「買わない？」「という。

「決めた。茶色にする」

そう言うと千博はさっさとレジに向かっていった。ぼくはそれを見送り、自分は店内の他の商品を見ることにした。

千博の悩んだ時間はおよそ二分だった。それは、ものすごく短い。一応、悩んでいたにも関わらず、その時間がとても短い。それはそれは気持ちのいいことであるが、ぼくはなんだか物足りなかった。

いいものは、悩んだ末に手に入れよう。そう思ったのだ。何かの標語みたいだなと思い、笑う。

「ユカはどう？」

ぼくの笑みを見たか見てないか、彼女はまた、さっさとレジから帰ってきてぼくに尋ねる。

「ないねー」

「そう」

そう言うと千博は店の外に出ていく。しかし、そのスピードは後ろに続くぼくを気遣ったものであり、なんだかとても居心地のよさ

を感じた。

昼食をとり、映画を観に行った。その間もぼくと千博はたくさん話をする。この間の発言を意識してか、自然にぼくは話に力を入れていたように思う。しかし、彼女はそんなぼくの話をつんつんと聞いてくれていた。笑ってほしいところで、にやりとしてくれるのもうれしかった。

ぼくは少しだけ、自分に自信が持てるようになっていたのだった。そんな時間を与えてくれる彼女には、感謝をした。自然、千博はい人に見えた。

「もつと面白い映画を知ってる」

エンドロールが流れ終わり、劇場の明かりがついたとき、ぼくは無意識にそう言っていた。

「なんていう映画？」

隣で千博が言ったが、ぼくはただ「うん」と答えただけだった。

12

「トランプやんねえ？」

教室の隅で昼食を取っていた恒太郎に、佐々木がそう言った。その後ろには二人人がいる。二人とも、同じクラスで、植木と八嶋という。

「やろうか」

そう言っつて恒太郎は腕をまくる動作をする。にししし。そういう音が似合うような表情もつくった。

四人が円になるように座ると、佐々木がカードを配り始める。植木も八嶋もしゃべり通して、場はやたらとうるさく、やたらと明るい空気だった。恒太郎もそこへ混ざり、テンションを高く保っていた。

勝負は何度も続いた。恒太郎は一度勝っただけだった。あとは全部右隣にいる八嶋が勝っている。強い。

「なんだよ、強いなお前」

三人にそう言われ、八嶋はにやにやしている。その姿も可笑しく、恒太郎も声に出して笑った。

音。

振動か。携帯の振動音。場に流れた。見ると、佐々木がそれを持って場から離れて行った。勝負は少しお預けになる。残された三人はたわいもない話をした。次の授業の先生の話。少し離れたところにいる佐々木の声はしかし、こちらにもよく聞こえていた。楽しそうに声を出す佐々木。時には大声で笑っている。

恒太郎は手に持っているカードで作戦をたてかけていたが、時刻が授業開始ぎりぎりであることに気づく。

佐々木はまだ電話をしている。

授業のノートと筆記用具を机に出す。そのとき無意識に日付を確認する。それはいつもの癖だった。

授業開始のチャイムが鳴る。各々トランプを片づけ始めた。

佐々木はまだ電話をしていた。やがて電話を切ったところに、先生が教室に入ってきた。そしてそのまま、授業が始まる。

13

車を止めて山道を五分ほど歩いたところに川の流れる音がした。と、思っただけでそれが姿を現したのだった。

「おお」

木々の間から見えるのは、澄んだ水が流れる川と、向こう側までつながれた吊り橋。きれいなアーチを描く、なんとも絵になる光景だった。吊り橋の向こう側に見える緑を見て、改めて今自分たちが緑の中にいるのだと実感する。ぼくは空気を思いつきり吸った。

「行くぜ」

前を歩く大水が言う。彼もこの景色に一瞬声をなくしていたが、持ち前の明るさとしやべり通しの性格はすぐに復活し、今度は早く

吊り橋を渡ろうとするやんちゃな子供みたいな面を見せる。彼はいつも笑顔だ。今、振り返ってぼくらを誘う顔にも、笑みが浮かんでいる。

そんな大水を見てぼくも気持がよくなって、心の中で笑う。いや、実際の顔もにやけていたかもしれない。大水は昔からこういうやつなのだ。変わらないことに安心感を抱く。

ぼくは大水に続き吊り橋に足をかける。つり橋を渡るなどという経験は今までにすることがなかったので少しどきどきしたが、そのつくりは結構しっかりとしていて、変な音もしなかったし、揺れも少なかった。

半分くらいまで渡ったところに後ろを振り返ると、橋本はまだ橋に足をかけてすらいなかった。かわりに彼はカメラをこちらにむけていた。その口角があがり、ぼくが何かポーズをとる前にシャッターを切る。

ピピッ

その音は川のせせらぎにかき消され、遠くまでは届かない。ぼくの想像だった。

「おーいー」

遅れているぼくらに気付いた大水が読んでいる。彼は彼で、もう向こう側に到達していた。ぼくもそちらへ向かう。橋本もカメラをしまい、後に続く。

「なあ、あれだろ？ 俺らが泊まる旅館」

大水が指差した先には、自然に囲まれながら一つだけ趣深く立っている建物があった。それは自然と一体化しており、かなり上品な佇まいだった。ぼくは若干気後れする。

「いいところだなあ」

ぼくの肩に手を乗せて橋本が言う。そのタイミングはまるでぼくの心を読んでいるかのようなものだった。橋本はしかし、ぼくを見ているわけではない。

たまのことだからいい旅館にしようじゃないか、そう提案したの

は橋本だった。ぼくら三人は幼馴染で、今は会う機会も減ってしまったのだが、こうしてたまに旅行にきている。それはいつも橋本が仕切ってくれている。そして彼は、人のことを細かくみているし、面倒見がよい。一緒にいて楽な気持ちにもさせてくれる。とてもいい人間だった。

「ここから旅館まで、何歩でしょう」

大水が楽しそうな声で聞く。

「乱歩」ぼくはすかさず答える。

「一番遠い答えのやつが、酒をおごる」

ぼくのセリフなどなかったかのように大水は続ける。いつものことであった。橋本は細い目でぼくを見ている。ぼくもそれを真似し、細い目で見返してやる。すると、数秒でそれは笑いに変わる。

「な、なあ、答えるよー」

地面の石を蹴りながら大水が言う。

「そうだなあ」橋本は笑うのをやめて考える。「九百歩」

「ふん。じゃあお前は？」大水がぼくに聞く。

「そうだねえ、じゃあ……千二百歩」

「ふん。俺は七百だ。よし」

三人は一直線に並び、視線を交わす。

「行くか」

大水のその言葉を合図にぼくらは足を踏み出した。歩幅を合わせ  
て。

14

「君は間違っている」

テレビ画面の中で天使が言う。そのセリフ自体にある意味はしかし、流れに流されて小さなものにすぎなくなっている。

悪魔はしかし、ただ自由に生きているだけだった。朝から歌を歌い、お昼にはピザを食べる。そして夜には酒を倒れるまで飲むのだ

った。

天使を演じている男も、悪魔を演じている男も、二人ともとても演技がうまい。才能がありすぎる。恒太郎にはそう感じることもできない。

好き勝手生きる悪魔を天使が理屈でやっつける。天使さえいなければ悪魔はずっとずっと楽しい生活が送れたというのに。しかし天使の理屈は本当に筋の通ったものばかりであった。

物事の本質なんて、決めつけるものではない。恒太郎はそんな天使を見ながら思った。青熊に関してもそうだった。楽だけして生きる、それが人生だ。そう言っただけで生活するのも、疲れるのだ。

何も決めてはいけぬ。決めない方がいいに決まっている。恒太郎は半ば自分に言い聞かせるように考えた。この天使と悪魔のやり取りはまるで自分の頭の中のようなものだ。理屈ばかりが溢れる世界。しかしおそらくこの演劇を見たほとんどの人がそう感じるのだから。不思議だった。

やがて天使と悪魔は突然に声を出さなくなる。

恒太郎がリモコンの音量をゼロにしたのだ。画面には二人の男が会話する様子が映されている。

何もかもうまくできている演劇を見て、自分は何を思うのだろうか。期待をしているのだろうか、楽しめているのだろうか、ただ評価しているのだろうか。

ブチンッ

テレビを切る音が部屋に響く。他に聞こえるのは、パソコンの音くらいだった。恒太郎はDVDデッキの電源を切り、パソコンを自分の方へ引き寄せる。そして近くにあった本を開く。今の気分ならできるだろう。恒太郎はレポートに取り掛かる。

期限は差し迫っていない。だけど、今やるのがきつと最適で、今やっておけば明日からはやらなくてはいけない思いに駆られることはないのだ。やってしまおう。そう思った、いいことなのに何故か言い訳じみた言葉を頭に流して自分は、キーボードをたたく。

頭を回転させる。課題のことで頭をいっぱいにするのだ。

やがて、集中力が高まり、課題に正面から向き合う。恒太郎はただ本の内容を頭に入れ、理解し、それをまとめて考えをキーボードに落とした。パソコンの画面の中の白い紙に、ものすごくゆっくりなスピードではあるが字が埋まっていく。恒太郎はそれを見て、安心する。そして作業に没頭する。

やがて下書きが完成したところには、始めてから二時間がたっていた。用紙に書き写すのは明日にしようか。そう思い布団を見るが、眠くはない。眠くないのに布団に入っても仕方がない。すると今すればいいではないか。そうなのか。

四十分。

そして恒太郎は布団にもぐる。レポートを仕上げた達成感を味わってはいるのだが、どこか府に落ちない点もないわけではない。なんだか、消化不良の頭だった。いつもこう。自分の頭はいつもこう。何もできないし、才能もない。そして自信もない。自信があれば、不安になることなんてないのだろう。いいなあ、自信人間は。

電気を消すと、真っ暗だった。

いやだ。

恒太郎はただ、そう思った。

15

じゃがいもとチーズ。ナスとベーコン。

ぼくは近くのスーパーに行き材料を買って、それを使って今からピザを作ろうとしている。

何回か作ったことがあるので、レシピを見ずに作れるようになっていた。手際もよく、作業は滞りなく進んだ。やがてオーブンにピザを入れてスイッチを入れると、ぼくはリビングに戻った。

見られてる。

見られてるよ。

そこにはソファの上に座った芹沢さんと君江さんがいる。彼らの今日のビジュアルはこうだ。灰色のつなぎ。そして、手書き眼鏡。どうも彼らは手書きを気に入ったらしい。そして腕時計に続くのは眼鏡らしい。芹沢さんの方はつるの細い、インテリっぽいもので、君江さんの方はふちつきのものだった。きっと二人は二人で書きあったのだろう。

二人はぼくを見ていた。まずぼくの手を見てがっかりし、そうしてからぼくの目を見ている。

「今オープンに入れましたから、まだですよ」

皿の用意はぼくが家を訪れる前から完璧に整っていた。軽いサラダまで用意してある。

「ピザピザ」

「ピザピザピザ」

芹沢さんはそれしか言わない。

「芹沢さん」ぼくはそんな彼を見て、弱音を吐きたくなる。

「ピザ」

芹沢さんの顔は真剣で、手書きの眼鏡をしているのにもかかわらず、格好よく見えた。そんな彼がぼくに期待をしてソファで待ちくたびれている。それだけでぼくは気持ちが落ち着いた。

「もうすぐです」

そうぼくが言うのが早いのか、芹沢さんの鼻が動き出した。活発に動いている。においをかき取ったらしい。

ぼくはキッチンに戻り、焼きあがったピザをオープンからだし、さらに移す。確かに、とてもいいにおいがする。

リビングに戻ると、彼らはもうピザを切るためのナイフを、何故か両手に持ち、ぼくを待ち構えていた。

「危ないなあ」

机の上にピザを置くと、即座にそれは八等分された。神業だった。まるで漫画のようだった。

音もせずきれいに八等分されたピザを芹沢さんが三人の皿にそ

れぞれ一つずつ乗せる。そして、ぼくを見る。ぼくはその視線を受けすぐにソファに腰を下ろす。

「いただきますよ」

ぼくのその言葉を合図にして二人は嬉しそうにピザにかぶりつく。ぼくはそれを見て嬉しくなる。

ピザはおいしかった。そのこともぼくを喜ばせた。

最後のピザを食べ終わると、芹沢さんがぼくを見ていった。ピザ以外の言葉を聞くのは今日初めてだ。

「恒太郎も、眼鏡描いてやろうか？」

ぼくは笑った。

寒さがつのる日中、恒太郎はそれを隔てた本屋のレジで突っ立っていた。大学の近くにある本屋である。町の中心部からそうは離れていないが、駅から遠いため客が多すぎるといことはなかった。

今日は一限だけの日である。恒太郎は一限が終わるとそのままアパートに帰り昼食を食べる。そして間髪いれずにアルバイトにやってくる。ここはアパートからは自転車で十分ほどのところだった。

暇ではない。客は本を買っていくし、掃除もしなくてはいけない。それに心がなんだか忙しかった。人々の動く姿を見ていると、自分も今何かをしているという意識が強くなり、焦りに似た感情が芽生える。アルバイトに来てばーっとするなどということは一度もなかった。いや、普段の生活もそうなのかもしれない。それはいいことなのか、悪いことなのか。

茶色いベストを着た若者が店に入ってきた。外は風が強いのか、寒そうだった。店に入った瞬間の顔には、暖かいところに来た安心感が浮かんでいた。

さつきからコミックの棚を何度も往復しているのは、髪の毛の短い女子だった。高校生くらいだろうか。しかし平日のこの時間帯に本屋にいるのだから実は恒太郎と同じくらいなのかもしれない。

雑誌のコーナーにはうるさく主張する表紙がいくつも並んでいて、目をやるといくつかの字を追ってしまう。そんな時間の過ごし方もありだった。

恒太郎は背筋を伸ばし、レシートの整理をしていた。すると後ろから話しかけられる。

「レジ変わるから、モップかけてきてくれる？」

そう言ったのは店長だった。もうすぐはげ、そんなニツクネームが似合うような彼はしかし、はげてはいない。額が異常に広いだけだった。

「はい」

抑揚も何もつけずに恒太郎は答え、場所をあける。モップを手にして、本棚の間を掃除し始める。

この本屋には、他にもアルバイトがいる。しかしその中で話をしたことがあるのは数人だった。話をしたといっても、大したことはなく、実際のところ親しくなれそうな人は一人もいなかった。そうなる恒太郎も、頑なに一人を通し、話しかけられないような態度をとった。本当はその行動には大した意味がないのに。

店の中心の柱にかかっている時計が六時を指したころ、同じアルバイトの船井がレジに立ちながら船をこいでいた。客が本を手にそれを見ていた。恒太郎はレジに近づき、清算をした。船井はごめんと小さく謝った。彼は恒太郎より一つ上だった。

やがて七時になり、恒太郎のバイト時間は終わる。そそくさと事務室に入りタイムカードを押すと、帰宅の用意をし、店を出た。店の外は真つ暗だった。

「さむ……」

思わず声に出してしまう。そうだ、本当に寒い。薄い上着しか持つてこなかった恒太郎は急いで自転車に乗り、漕ぎ出した。

卵を買おうと思つてたんだよな……。でも明日でもいいか。いや、今買った方がいいか。ああ、それにしても寒い。

迷いながら交差点を右折し、近くのスーパーに自転車を止める。

そして卵と、少しの野菜、それにサケを買つて店を出た。また寒さと向き合った。

帰ろう。

恒太郎は自転車にまたがり、ペダルをこいだ。それがどうしても、一生懸命に見えていそうだと思つてしまうのは、自意識過剰なのだろうか。

休日のある日。ぼくはチェックのワンピースを着て町を歩いていた。ワンピースの下は最近買ったデニム。履物はブーツだった。髪は髪どめで止めてある。

「恒太郎さん」

時計屋の前を通った時、ぼくはそう呼びとめられて声のする方向く。見ると、右の通りから、とてもおしゃれで上品な服を着た君江さんがぼくの方を見て笑っていた。

「ああ、こんにちは」

「ええ。この間は美味しいピザをありがとう」

「いえ」

「あら、この辺でアルバイトでもしてるんですけどっけ？」

君江さんはそう言いながらぼくの手荷物を確認する。ぼくは今何も持っていないかった。ポケットに財布は入れてあるのだが。

「いや、ぼくの働いている本屋はもつと先です」ぼくは北の方を指さす。

「ああ、そう」

君江さんはとてもきれいだっただ。髪をきれいにとかし、高そうな服を着ている。ぼくは少し目を奪われていたが、すぐに「立ち話もなんですし、たまには二人でお茶でもいかがですか？」と言ってみた。すると君江さんにはこやかに笑い、「ええ」と答えた。今日は腕時計も眼鏡もなかった。

近くの喫茶店に入ると、ぼくらは紅茶を頼む。やがて運ばれてきた紅茶は暖かく、身体が温まった。

「こうして見ると本当に女の人のようね」

「そうですか」

あまり関心がなさそうにぼくは答えた。実際、特に意味はないと思っている。しかし、ほめられるのなら悪い気はしない。

芹沢さん達に会うときは、服装はまちまちだった。

「今日芹沢さんは？」

「あの人は今家で映画を編集してる」

「そうですか」

ぼくはそうしている彼を思い浮かべる。想像の彼はとても真面目な顔で、もちろん眼鏡は手書きではなく本物だった。

「元気がないね」

君江さんが窓の外を見ながら言う。ぼくも視線を窓の外に移すが、特にこれといったものは見られない、日常の景色だった。普通に店があり、普通に人が歩いている。

ぼくは何も言わず、紅茶に口をつける。少しだけ冷めたそれは先ほどより飲みやすいが、暖かい方がよかったとぼくは思う。何も変わらないことが、どうしてできないのであろう。

「でも恒太郎さんはいつもそうね」

ぼくは君江さんを見る。彼女は鮮明で、しかし形がなかった。

「よく分かるんですね」

すると彼女は微笑んで、言う。

「みんな分かってるわ、みんな」

ぼくはその言葉を心の中で繰り返した。

やはり冷やかな自分の部屋は恒太郎を歓迎していないかのようだった。寒い。恒太郎は電気を点け、うがいをする。そして腰を下す前に、部屋の奥にしまっていたホットカーペットを机の下にしいた。これだけでこの部屋は暖かくなる。この部屋はこれだけで自分にとって居心地のよい場所になるはずなのだ。

ホットカーペットのスイッチを入れて、床に座る。テーブルにはこたつ布団を用意した。まるで冬の支度だった。恒太郎は自分を寒がりだと思っている。寒がりだとか暑がりとかは誰に言われたらそ

うなのかと常々思っているが、世間の基準が低いことを知った今では、自分は寒がりだと思おうようになった。

「私、変わってるの」

「私、細かいところで記憶力がいいの」

それらが何を基準にしているのかが分からない。自分の説明をしたい気持ちはすぐく分かるが、もうちょっと冷静になると自分に言い聞かせる瞬間だった。しかし、そういう話になると、人は喜ぶ。それを利用して人とコミュニケーションをとる自分。気付くと虚しく、悲しかった。自分は冷たがりなのかもしれない。

電気力でカーペットが暖かくなってくる。幸せな瞬間だった。床に大の字で寝転びたい。しかし、しない。それはそれで面倒くさい。

恒太郎はいつものようにテレビとDVDのスイッチを入れようとして、今度はテレビだけを点けた。ニュースに変える。今日は何があったのだろうか。ものすごくほのかな興味だった。

しかし、ニュースはやっていなかった。ニュース番組では今、何故か今日の料理をやっている。

画面をじつと見る。そこには小さい入れ物に入った調味料が並んでいた。こういうのが好きだった。料理番組は大好きだ。心が躍る。しかし、その料理を作る人、食べる人、周りにいるお笑い芸人などのしゃべりを聞いているとまた気が滅入ってきた。

ため息が出る。今日も一日が終わる。自分は何ひとつ変わっていない。毎日毎日考えることだけをし、変わった自分を想像するも、行動には移せない。

電話を見る。誰かからかかってこないだろうか。  
食欲がない。

そして食材もない。

「ちようどいいのか」

なんかそれも悔しいな。丁度いいなんて、何か変だ。

恒太郎はそのままこたつでじーっとしていた。暖かさ、思考だ

けを背負って時間を過ごす。何かをしようにしてもすぐに嫌になるのは分かっていた。というか、すでにその何かを想像しただけでいやな気持ちになっている。仕方がない。

電話を見る。そして同じクラスの佐々木を思い出した。あいつは電話をしていたな。

あいつはいいやつだ。だけど、自分とはうまくいくのか分からない。

寝ようか。眠れないに決まっているが、寝よう。

恒太郎は冷蔵庫から酒を出し、少しずつ飲んだ。その液体は一日の疲れた体に重く浸透し、気持ちよくなる。半時間もすると、眠気がやってきた。すかさず電気をけし、布団にもぐりこんだ。

19

「トランプしようぜ」

大水がそう言って自分の荷物からトランプを取り出した。夕食がすみ、机の上に残っているのは酒のみだった。

「ああ、しよう」

「ぼくも機嫌がよく、笑っていた。」

「おう、いいな」

橋本もやる気満々だった。

広い机の上にトランプが配られていった。大水が一枚一枚三人のところにおいていく。

「おし、まずは七並べな」

七並べか。久しくやってないな。何だか懐かしい気持ちになる。

懐かしいなどと、まだ二十歳そこそこの自分が思うのは変なことなの。

「俺からだ」

大水が言い、カードを置く。彼はダイヤの七を持っていた。

七並べは楽しい。そして、この三人でやっていることで、酒が入

っていることで、ぼくの気分は最高のはずだった。実際ぼくは始終笑顔だったし、楽しかった。しかしそれはなんとも虚しい思いをさせた。

「何か悩みでもあるのか？」

橋本が三連勝を遂げた後にぼくに言った。見ると大水もこちらを見ていた。

「いや、大丈夫だ」

ぼくはそう答え、

「お前らは？」

橋本は笑って、

「大水にはないよな」

その言葉に大水は「なんだよー」と笑ったが、ぼくは今の空気が好きで、嬉しくなった。大水は、昔からこうなのだ。橋本も。そう、昔から。

「料理美味かったな」

ぼくは言った。すると二人ともうんうんと頷いた。

「やっぱこれくらい出すと違うんだな。めっちゃめっちゃ美味かったもん」

「な。まずいのなかったな」

ぼくらは時間を共有し、同じ料理について話す。

「大水の食べ方は相変わらずだったなー。好きなものを最後に残す」

「いんやあ、今日はみんな美味かったからなあ。あれでも試行錯誤を重ねたんだぜ」

「重ねた結果エビが最後か」

「もちろんだぜ」

それからは仕事の話。昔の話や今の話、いろいろした。話題は尽きることはなかった。ぼくらは全力で話し続けていた。

そしてぼくらはずいぶん長い間話す。朝が訪れることはない。

授業開始の十五分前に家を出た。やはり外は肌寒く、時刻はもう十時程であったが、気温は低かった。そう言えば今日からまたいつそう冷え込むと天気予報でやっていた。

自転車に乗る。サドルが冷たいのに心の中で悲鳴を上げる。そのままゆっくりと漕ぎだした。

アパートの前の道を東に100メートルほど言ったところで右折する。そこからは一本道だった。走っている途中風を切りながら恒太郎は、周りの景色が昨日と変わっていないか確認をする。同じ時間に登校する生徒が恒太郎を抜いていく。彼は先週食堂で見かけたな。あっているか分からない憶測を恒太郎は平気で確信にうつす。

やっぱり近い大学。門をくぐり、図書館の近くに自転車を止める。本を二冊、返そうと思っていたのだった。そのまま図書館に入り、本を返す。中は暖かかった。再び外に出たときには、少し身体が熱くなっており、冷たい空気が気持ちよく思えた。

恒太郎の通っている大学は決して広くはない。学部が一つしかない工業大学なので、学科数も知れている。他の大学に比べればとても狭いに違いない。恒太郎は建物を見渡す。こうして見ると、入ったことのある教室は少ない。

図書館から少しだけ離れた建物に向かう。そこが今日の最初の授業の教室だった。今日の授業は、ただノートをとるというものだ。先生は、そんなに板書が好きなのかというほどに書き続け、生徒らはただそれを書き写す。たまに誰かが質問をするが、人のしゃべる声が聞こえるのはその時くらいで、全体的にみると静かな授業である。

しかしこれで勉強になるのだった。先生の板書は汚く、形式もわざと下手に取ってある。それを生徒らがノートに写すとき、生徒らはどうしても内容について考えないことにはそれを写せないのだ。形式を考え、どこに言葉が入るかを考える。この授業はひたすら学びの九十分である。ただ写すだけの授業のはずが、終わったところに

はとても疲れている。もちろん、生徒の中にはノートのコピーを回したりしている奴もいるが、それでは恐ろしく頭に入らないのだ。た。

授業開始後、恒太郎は今日もシャーペンを走らせる。頭の中にはいくつもの言葉が浮かびあがっている。いくつかはメモし、後で調べることにする。いつもそうしているのだが、調べるのは結局テストの直前になってからであろう。メモはきれいなまま次々と数を増やしていった。

その授業が終わると、あともう一つ授業を受ければ今日は終わりだった。そして今日が終わると週末だ。休みである。心が解放されるようでもあり、しかし何もできないのは目に見えている。しかしそうは言っても休みは待ち望むものに違いなかった。

携帯電話を確認する。そこには誰からの連絡も知らされてはいなかった。音が出ないようにそれを閉じる。

午後は、普通に過ごした。問題も変化もなかった。ただ、レポートが出た。

21

天井の色を声に出して言ってみたり、うずくまって布団の端の糸のほつれの長さを考えたり、無意味なことをしていた。

家から出る気力がない。

もともと、今日のは出かける予定はなかった。出る必要はないし、出ようとも思っていないかった。じゃあ、問題はないはずなのだが、問題なのはこうした日々が一昨日から続いていることだった。

流石に誰かから連絡があるだろう。そう思って携帯電話を開くも、誰からも連絡はない。ぼくはいろいろな人の顔を頭に浮かべる。しかしみんな、ただ空疎に笑っているだけだ。

ひきこもり屋っていうのはどうだろう。

はいはい、ひきこもりですよ。よってらっしゃい、見てらっしゃ

やうい。

これでは何をもって仕事としているのかがよく分からない。そうか、ひきこもるのなら、ひきこもって何かをしなくてはいけないか。しかしそれはちよつと違う気もする。

「白。でもちよつと黄色。あとちよつと灰色。茶色も」

天井の色は、難しかった。ぼくは色の名前を知らなさすぎる。

芹沢さんは、ぼくのことをどう思っているだろうか。千博は、今何をしているだろうか。誰か、ぼくのことを考えてくれている人はいるだろうか。

「いる」

思われている。ぼくは何人の人に思われている。

そのうえで連絡が来ないのだ。それは確信に近かった。ぼくの考えなのだから、正しいとか正しくないというものでもないのだ。

ふと、いろいろな景色が見たくなり、ぼくは布団から出た。そして台所へ通じるドアを開ける。そこには想像通りの、真っ白な一本の道が現れた。永遠に続いていそうな道。きれいな道だった。

こんなきれいな道は、あの劇団によく似合う。あの人がここを走り、そしてあの人が冗談を言う。ぼくは想像しながら、普通のスピードでそこを歩いた。出口はない。

しかし急にさみしさに似た思いに駆られる。何も無い。何も無いのだ。これではいけない。

ぼくは不安になり、周りを見回した。すると近くに宇宙船のようなものがあった。ぼくの着ている服は普通だったが、ぼくは疑いもなくその宇宙船に乗った。それは一人用らしく、ぼくが乗ると中は狭くなった。

これがスイッチだろうと思う、青い出っ張りを押した。そしてハンドルをつかむ。するとどうだろう、外は相変わらずの真っ白から、急に反転、真っ暗の空に星が出ている。ぼくは冷静で、その中を進んでいく。まだぼくは一人だった。

『どこにいるの？』

通信装置のようなものから声がした。それは誰の声だったろうか。芹沢さんの声のようにも聞こえ、君江さんの声にも聞こえ、はたまた千博、大水、橋本、誰の声にも聞こえた。

そうか。やはりみんなぼくのことを考えていてくれたのだ。ぼくは嬉しくなって答える。

「ここだよ」

22

連結部に近いところに座っていた恒太郎は、電車が出発したときから強い揺れを感じていた。電車とはこんなにも揺れるものだったか。高校の時に通学で使っていたときは気付かなかったな。

手に何も持っていない恒太郎は無意識に指を組んでいた。今日は本もない。

周りの人間はみな知らない人だった。しかし、一度その顔を見ると、次見たときには何故かもう知っている人のように見えるのは不思議だった。同じ時間を共有しているということだけで、何かの感情が芽生えるのだろうか。その、あまりにも大したことではない関わりですら感じる共鳴は、どうして普段の日常コミュニケーションで発揮されないのだろうか。

鞆に手をつっこむ。そういえば音楽プレイヤーを持っている。恒太郎はそれをヘッドホンに接続し、電源を入れ、ヘッドホンを耳にあてた。音楽が流れてきた。いきなり、大声で歌い出した男の声にはとても惹かれるものがあり、少しの間だけ夢中になる。

車窓から景色を見る。音楽を聴く。これは十分な、ながら作業であり、二つのことをしているのだから忙しいと言えた。音楽のリズムと景色と電車のスピードをうまく合わせられないかと思ったがうまくいかなかった。建物の現れるタイミング、その高さがいかにもまちまちだったためである。

目を閉じる。そしてすぐに開ける。

二時間は長いな。今、恒太郎は実家に向かっているのだ。学校から帰ると、着替えと、兄に頼まれていたCD、あと少しの用意を持ってすぐに出発した。迷いのない行動には無駄な時間は必要だった。効率のよい時間の過ごし方を何故か無意識に頭で考えていた。

家に帰るのは夏休みぶりなので約二カ月ぶりだった。決して久しぶりではない。何も変わっていないし、何かが変わっていることを期待しているわけでもなかった。

電車に乗っていると、きつといるんな会話が聞こえる。恒太郎は今ヘッドホンをしているので聞こえないが、あの、扉の近くに立っている高校生はきつと昨日のテレビドラマの話をしているのだろうし、その近くの二人席に座っている髪の長い女性はきつと、家族の話をして友人にしているのだ。そして通路を挟んでその向かいに座っている三十代くらいの女性は今日の夕飯について考えている。彼女はそうだ、最寄り駅に着いたら、とめてある車に乗って近くのスーパーに向かう。そこで今日の夕飯の材料を買うのだ。あの顔はそのメニューを悩んでいる顔なのだ。

恒太郎の家の夕飯は何だろう。考え始めて、しかし、もやっとしたものが想像の中に漂う。少し苛立ちを覚えたのだ。

また景色を見る。真っ暗で見えないが、視線の先には山があるはずだった。しかしそれは今見えない。今見えなければ、意味ないのではないか。見えなければ、山はないに等しい。

恒太郎は今日、親の作った料理を食べる。

祖父母は大学に通う恒太郎を称賛したが、彼らには何か見えていのだろうか。ぼくの未来に。恒太郎には、何も見えなかった。なにに等しいのだ、未来なんて。

ぼくはありとあらゆる時間の過ごし方を思い浮かべては実行した。

本を読み、映画を観た。しかしそれらは半日ももたない。気力はどんどん低下していく。何気なくぼくは、机の上のパソコンのスイッチをつける。そして、ある掲示板をのぞいた。そこはぼくがいつものぞく、他愛もない話ばかりをしている掲示板だった。

『味噌田楽が食べたい』

『旅がしたい』

『ノーベル賞つてすげえな』

そこには様々な人間が様々なつぶやきを書き込んでいた。それに対してのレスもいくつかがみられる。ここの掲示板は思ったことを書きこめるという点で、ぼくはいつも利用していた。

キーボードに手を置く。今考えていることをそのまま書く。

『消えたい』

すると、すぐにもレスがついた。

『俺も』

『もちろん私も』

そのスピード感到に安心しながらぼくは続ける。

『何もしたくない』

今度もすぐに返信がある。

『そうだな。じゃあ、千歩譲ったら何ができるか考えてみようぜ』

『千歩かあ』

『私、電話は一億歩』

『そうか。俺はじゃあ、千歩だったら、チャーハン作るよ』

『チャーハン？』

『ああ。チャーハン作る』

『美味しいのか？』

『さあ、しらね。作ったことないしな』

『Rは？』

ぼくは少しだけ考えてキーボードに指を走らせる。

『勉強かな』

書いていて自分でも驚く。そうか、自分は勉強がしたいのか。

『なるほど。確かに』

『はあ？ 俺は絶対やだなー』

『学びはいいぞう』

まるで直接話しているかのような錯覚に陥り、ふと他人の存在に気付いたりする。ぼくは落ち着いてキーボードのひとつひとつを眺める。人とのコミュニケーションがみんなこんなだったなら、もっとうまくいくのだろうか。それでは一体、何が違うのだろうか。

エンターキーを押すたびにぼくの胸は静かに躍った。

ふと、何かのにおいが部屋に充満しかけていることに気付く。ぼくは反射的に周りを見回す。しかしもちろん何かがあるはずも、誰かがいるはずもない。何だ、一体。

パソコンはそのままに、立ち上がり玄関の方へ向かう。見ると郵便受けのふたが開いており、そこから何かが見えている。

ほんの少しだけ笑った。「誰か」がぼくの部屋の前で、料理を手においを部屋に送っている。なんだよ、それ。

団扇で仰いでいるのか？ その図は滑稽だ。ぼくは想像してみたが、そこに人のぬくもりはなかった。

このにおいは本物か？ 本当に誰かそこにいるのか？  
ぼくはゆつくりと、玄関のドアを開いた。

24

玄関の扉を開くと、廊下の突き当たりには明るい照明が見えた。家のおいがする。突き当たりにあるドアを開くとそこは居間で、今は家族三人が恒太郎を待っていた。

「時間、ぴつたりだな」

「相変わらずだなー」

言ったのは兄と父。恒太郎は「ただいま」と言うと、すぐにまた部屋から出、二階の自分の部屋に荷物を置きに行った。

自分の部屋のおい。何日かに一度は母が換気をしていると言っ

ていたが、換気では取り除けない、自分のにおいがそこには染み付いていた。嗅覚では分からない、自分のにおい。

電気をつけるとまず目に入ってきたのは、入口のすぐ横にある日本地図だった。すぐにも安心感が体中に走った。

「ああ」

ただいま、と思う。この日本地図は恒太郎が中学生のときに自分で模造紙に書いたものだ。日本列島を書き、県に分け、それぞれの県には恒太郎が勝手に抱いたイメージと、少ないけれど人口などのデータも書いてある。もう7、8年は前のものだから、データも古いかもしれない。けどそんなことはどうでもよかった。湿気で紙が湿ったり、乾いてぱりぱりになると、恒太郎はこの地図を自分の部屋のシンボリック存在の一つとして決めていたのだ。

荷物はベッドに無造作に置き、居間に戻る。その際、洗面所によつてうがいをする。水が冷たかった。気持ちがいい。家に帰ってきた少しの高揚感にその冷たさはたまらないものだった。

「鍋、鍋」

父は嬉しそうに言う。

「お酒飲む？」

母は何故か慌ただしげに言う。

「……………」

兄はただ黙々と食べている。

三人が三人とも恒太郎を歓迎しているのは何となくわかった。それが少しくすぐったく、家族の温かみを感じる。土曜日がこんな日になるのは悪くない。そこには険悪な空気もなく。

本当か？

ちょっとしたことでもバランスを崩す恒太郎の家族は、すぐに空気を悪くし、みながみな苦しんでいた。そんなのは、ついこの間だつてそうだったのだ。そう、今の状態は、ただ、今日の状態なのだ。でもそのどこがいけないのだろう。いいのか。いいのだ。今日、みんなが楽しければ。もし、何かバランスが崩れるようなことがある

れば、自分は喜んで譲歩しよう。

兄はがつがつと食べ物をお口に運び、父は酒ばかりを飲んでいる。家にいたころは嫌でしょうがなかった家族の食事のマナーにも、苛立ちを覚えなくなっている。これは成長なのだと思えばいい。勘違いするつもりはない。ただ、結果がよければ何でもよかった。

「うまいな。やっぱり鍋は大人気で食べたほうがうまい」

恒太郎は思わず言っていた。仕方がない。口から出たのだから。

「そうさ、絶対そうに決まってるってー」

父が言う。その顔は赤い。しかし恒太郎は苛つかなかった。

たまにはこんな時間もいいな。虚しいだけの時間より、いいに決まっている。だけど、これが何になるだろう。考えても仕方がないのに、考えてしまう。

これに関しては、フィクションなんか大嫌いだった。

「返却は再来週の木曜日ですね」

カードに印字された日にちを指しながらぼくは言った。相手はここにはよくくる男性だった。名前は確か、持田さんだったか。

ぼくは目に見える範囲で館内を眺める。現在の利用者は三十人とあったところか。時刻は九時半。いつも通りの人の量だった。この図書館は広い。もちろん、こんな世界の図書館なのだから特殊でないはずがないのだが、それはもう背の高い棚から、画質よく映像を見られるスペースなど、いろいろなものがある。背の高い棚というのは、今目の前に何列も並んでいる、全長約六十メートルの棚だった。もちろん高いところに行くのにはリフトや梯子が用意されているが、ほとんどの利用者は「飛んで」そこまで移動していた。

「井上くん」

「ああ、ミドリさん。おはようございます」

「おはよう」

話しかけてきたのは、この図書館のすぐ近くでカフェを経営している青木緑だった。

彼女は有名だった。社交的で、才能があつて、たくさんの人に頼られている。もちろん、知り合いが多い。ぼくもその知り合いの一人だった。

「あのさ、この間言つてた本、あつた？」

「ああ、ありましたよ」そう言つてぼくはすぐに受け付け内の棚に移してあつたその本を見せる。

「どうも違う棚にまぎれていたらしいですね」

「そっか、ありがとう」

料理の本だった。緑はカフェで出す料理をいろいろと研究しているのだろう。実際の厨房には変な五人組と、共同経営者の藤木信一郎がいる。藤木はできた人間で、安心していろいろ任せられるとよく緑は言っている。そのカフェはやはり有名で、いつも混んでいる。

「あと何かお勧めは？」

そう言われたのでぼくは、最近入ったミステリーや、新たな視点で書かれた面白い辞書などを薦める。緑はその話を真剣に聞いていた。

「やっぱり、本のことは井上くんに聞くのが正解だ。分かりやすいし」

ぼくは笑つて返す。そう言つてもらえるのは何よりもうれしかった。

そのとき、後ろの方の棚で困つた顔をしてこちらを見ている人がいるのに気付いた。ぼくは慌てて立ち上がり、緑に「すみません」と言つと、そちらに向かう。

少し力を入れると身体はふわりと浮いた。そしてそのまま浮上し、その人のところにたどりついた。

「どうしました？」

この世界にも、いろいろな職業がある。けれど、普通の世界と違うのは、誰もが自分のなりたい職業についていることである。ぼくももちろんその一人で、図書館司書を六年やっている。

六年。多分、六年やっているのだ。

自宅は自分の好きなように作られている。何と気持ちのよいことか。住みやすいのは当たり前のこと。

道は、きれいである。土の色がよく、コンクリートなどはない。車などは一台も通っていない。ただ、空には筭であっちこっちを歩き来するものをよく目にする。

ぼくの家はとあるマンションの一室である。部屋のベランダからは東京タワーよりも高い塔が見える。そこへはいつでもいけるのだが、上ったことは一度もなかった。いや、もしかしたらあるのに忘れていただけかもしれない。

目をつぶるとその景色は歪み、夢から覚める。そんなことはない。そんなことすらないというのが正確だった。

ぼくは自分の部屋のベランダから塔を見ている。

「だってこの景色は瞼の裏にしか映っていない」

何の前触れもなく眠りから覚める。ゆっくりと目を開き、まず目に飛び込んできた勉強机を見て、実家に帰ってきていることを思い出す。自分のものはほとんどアパートに移してあるが、それでもこの部屋は半分ほど埋まっている。

身体だけを動かして、ベッドの上に置きっぱなしになっていた本を手に取ってみる。それは恒太郎が高校のときに読んだものだった。懐かしい。

懐かしいという言葉をよく人は言う。けれど、懐かしいという感情に、証拠はない。涙も出なければ、動悸が激しくなるわけでもな

い。人はみなきつと、意図せずその言葉を吐いているのだろう。

どうしてこの本はここにあるのだろう。どうしてアパートに持っていかなかったのだろう。考えながら、答えは出さずにそのまま本を元あつた場所に置いた。

本棚を見る。そこにはたくさんの本があつた。それは恒太郎が過去に読んだ本。それぞれに、その当時の恒太郎の指紋がついているのだ。それってすごい。

けれど、過去とは一体何なのだろう。昔というのは、どういう意味なのだろう。どうして昔という言葉は、口にするのをためらわせるのだろう。

やっと起き上がり、階段を降りた。居間のドアを開けると、そこでテレビを見ている父に出会った。

「おはよう」

壁の時計は午前八時を示していた。

「おはよ」

父はやっぱり何故か明るい声で言った。

恒太郎はそのまま着替え、歯を磨き、トーストを見つけ、焼いて食べた。この家には、いつのまにかトースト焼き機があつた。トースター、か。恒太郎がこの家に住んでいたときにはなかったものだった。聞けば、何かのくじで当たったものらしい。

チン！

そういう、びっくりマークのつく音を伴ってトーストが飛び出してくる。かわいい。恒太郎は少し笑った。

マーガリンを塗って、それが溶ける前に、パンが冷める前に口に放り込む。一枚食べると、お腹がいっぱいになり、寝転びたくなつた。うーん。

「今日は何をしよう」

と口にするのも何だったので、とりあえず自分の部屋に戻った。カーテンをあけ、窓も開けた。朝の空気は澄んでいて、それはアパートの周りの空気よりもきれいだった。そこから見える景色の中に

は、あのくそばばあはいない。

予習やら宿題の類は学校で済ませてきてあったので家にもち帰ったものはない。今日は何もしなくていい日だった。誰かを誘ってみようか。近くに住んでいる知り合いの顔を思い浮かべる。違つか。映画でも見ようか。いやそれではアパートの暮らしと変わらないでは、何をしたらいいのだろうか。

恒太郎は突然に思いつき、本棚の中からあるアーティストの全曲集を引っ張り出す。ページには何度も開いたあとがあり、軽く開けると、決まったページに移動していた。

適当にページを開き、あとをつけて閉じないようにする。そしてその歌詞を見て、歌ってみた。

階下には父がいたが、特に気にはならなかった。あの人はテレビを見ているから、自分の声など聞こえるはずもないのだ。

虚しさを抑えて、自分の声をよく聞いた。

歌っている間は、全曲集をじっと見ていた。

うーん……。そうだ、今日の夕食を作ろう。それがいい。歌うのをやめて、何をつくるかを考え出す。

がんも。がんもにしよう。

恒太郎はその旨を母に伝えようと、また部屋で歌を歌い始めた。気持ちがいい。自分の声が気持ちいいとか勘違いしてしまいそうだった。

しかし、隣の部屋で兄が起きる音がしたとき、歌うのをやめた。

またベッドに寝転び、先ほどの本をぱらぱらとめくってみる。

また読もうか。

いや、いいか。昔、読んだわけだし。

昔。昔っていつのことなんだっけ。

それからは四時間ほど、恒太郎はベッドの上で何もせずに過ごした。頭はせわしなくはたらいていたが、昼食をはさんでからはそれが昼寝に変わった。

道に緑が足りないか。そう思って道の端をみると、そこにはちゃんと野草が生えていた。そうか、生えていたか。ぼくは一人で頷いてまた歩き続けた。

ぼくの家は駅の近くだった。そこから今、適当に町を歩いている。駅の正面には小さな噴水があつて、そこでは若い男の人が二人でストリートライブをしていた。そこはいつもそうなので、みんなに受け入れられ、何人かそこで立ち止まって聴いたり、近くに座って聴いたりしている。

その噴水にぶつかつてから右に曲がると、すぐに楽器屋がある。何の気なしに視線を向けると、中で店長がギターを弾いているのが見えた。彼はたくさんの人に慕われている。音は聞こえなかったが、楽しそうな雰囲気だけは感じ取れた。

その店の前の道は延々とつづいている。次の町まで続いているのだ。図書館もこの道に面していた。ぼくは歩き続け、次から次へと店を見て行った。家具屋。雑貨屋。布屋。時計屋。紙屋なんてのもある。この町にはほとんどの店があるが、どれも大してかぶっていない。かぶっていたとしても、商売敵とかそういう話にはならないようになっていく。何より平和が大きなテーマなのだ。

黒ネコの形の看板を右に曲がると、すぐ左にカフェがあつた。緑さんの店だ。お昼時には少し早いので、すぐに座れるだろう。ぼくは吸い込まれるようにしてその店に入ってしまった。

「いらつしやませー」

奥のカウンターから藤木信一郎の声がした。彼はぼくに気付くと「ああ、ごぶさた」

と言つて自分の目の前の、カウンターの席を指した。店内にはまだ空いている席があつたが、ぼくは悩むことなくそこに座つた。

「大丈夫か？」

カウンターを挟んで向かい合つたぼくに彼は言った。彼とは幼い

ころからの友人である。

「大丈夫。ちよつと、ひきこもってたけど」

「うん。いや、知ってるけど」

ふふつと信一郎は笑う。ぼくもそれにつられて笑ってしまう。彼が営業向きだと思つのは、こついつときだった。客はきつとこの愛想の良さには弱いだろう。

「そんなときでも店にはこいよな。サービスしてやるから」

「ああ」

「で、何食べます？」

彼はそばにあつたメニューをぼくの方へ滑らせる。しかしぼくはそれも見ずにすぐに答えた。

「今日はクリームパスタ」

家を出るときから決めていたのだ。変人コックの一人、レイちゃんを作るパスタはおいしいと評判で、ぼくもそのファンの一人だった。

ぼくの声を聞いてか、偶然か、厨房につながる通路から顔を半分だけ出してその男がぼくの方を見ていた。

「見てるし」

「見てるな」

信一郎と一緒になつてそれを笑う。

「レイくん、クリームパスタだつて」

信一郎がそう言つと、右手をさつと揚げて宣誓のポーズをしたかと思つとすぐに厨房に消えて行つた。

その姿を見送つてから、再び信一郎はぼくを見て言う。

「緑も心配してたし」

「緑さん？」

「ああ、図書館行つたらいなかつたつて」

「ああ、休んでたから」

「いや、知ってるけど」

青木緑は本当に頼りになる、できた人気者だった。彼女を嫌いな

人はいないし、ぼくも例外ではない。そして今、その話を聞いてまた彼女への印象がよくなる。

「いい人だな」

「ああ」

そう言う信一郎の顔はどこか誇らしげでもあった。

しかしまあ、今この場に彼女がいないのはまだ寝ているからなのだろうけど。

「まあ、いつものことだ」

実際彼女が店に出ているところを見るのは三回に一回ほどだった。事実上店長は信一郎で、オーナーが緑だという話だった。

やがて出てきたクリームパスタは、やはり特別に美味しかった。

ぼくはこの店が大好きだった。いや、この店だけではない。図書館も大好きだし、他の店だって好きだ。

この町は、特別な町だった。

27

兄の自転車を借りて、近くのスーパーに向かっていた。通る道はどれも慣れ親しんだものだった。

家の前の道から二百メートルほど先にある三階建ての家。同級生の家だ。通り過ぎながらその顔を思い出し、思い出にふけてみたふと、その家の庭に誰かがいるのに気付く。それは友人の母親で、恒太郎も中学生の頃に何度も会っていた。

変わらないなあ。変わらなすぎる。

髪の毛から、服から何から同じのような気がするな。もちろんそんなことはないのだろうけど。

もつと進むと庭に犬のいる家を通る。以前はここでよく犬に吠えられたのだった。

いるかもしれないと視線を向けると、案の定犬は恒太郎を見て唸っていた。やがて吠え始める。そうか、まだいたか。そりゃいるよ

な。何してたんだらうな。

スーパーの駐輪場は混んでいた。恒太郎は何とか自転車をねじ込み、中に入った。そしてかごに次々と商品を入れて行った。無駄のないスピードで、さくさくと入れていった。豆腐、ひじき、じゃがいも、あとは何がいるんだっけか。

商品を入れ終わると、すぐにレジに向かい清算をすませる。再び自転車のサドルを踏んだのは約十五分後であった。そして再び犬に吠えられたのはそれから五分後。家に帰ったのは十分後だった。

時刻は四時半。恒太郎は買ってきたものを冷蔵庫にしまつと、先に風呂に入ることにした。かなり早いですが、むしろ何だか気持ちがいい。

台所に立ったのは六時前だった。材料を切り、豆腐は水を切ってから混ぜた。そうしてがんもをひとつひとつ揚げていった。一人暮らしではなかなか揚げものをしないので、久しぶりの揚げものだった。

全てのがんもを揚げ終わるころには、家族は着々と風呂に入り、他のものを用意していた。そして恒太郎が席に着くと、一斉にみんなが料理に端をつけた。

恒太郎はがんもを一口食べる。

美味しい。

「美味しい」

「美味しい」

達成感と満足感で気分がよくなった恒太郎は、また酒を飲んだ。というか、もうすでに用意されていた。それはいつもより美味に感じる酒だった。

兄の前にある皿のがんもはみるみるなくなっていた。恒太郎はそれを見て見ぬふりして、自分に近い皿のがんもを食べた。

それは一つめより味が落ち、なんだか少しだけ虚しくなった。

その夜。恒太郎は自分の部屋の布団の中で三時間は眠れずに寝転

んでいた。ただひたすら考えていた。自分という人間や、他の人間のことを。

昼寝したから眠れないのだろう。仕方がない。でもだからといって他にやることはない。仕方がない。こうしているしかないのだ。恒太郎の脳裏には今、様々な人の顔が浮かんでいた。しかしみんないい顔をしていない。それは自分のせいだろう。

自分には何もできないのは明確だった。毎日毎日結論として考えるまでもないのに、それでも毎日同じことを考えている。

「がんもなら作れるけどな」

そんな虚しい言葉は誰にも受け入れられず空中で消えた。

何も無い恒太郎にはでも、この部屋もあった。家族もいる。家族、それはかけがえのない存在だった。それも、毎日結論づけられることだった。

いろいろなことを考えて、最後に新手の疑問が浮かぶことがある。自分は今、何を悩んでいる？

すぐに答えられそうで、でもよく分かっていないことだった。

28

ガラスの引き戸を開けると、四列に並んだ洗い場と奥に湯船が見えた。その壁には富士山の絵が書いてある。ぼくは服を着たままで、その壁に向かって歩く。そこに人は一人もいない。

湯船につかうと、足を上げたとき、気配がして前をみると、富士山のとっぺん、白いところが黒くなっている。そしてそれは小さな黒から大きな黒へと変化していった。

穴か。

その穴が大玉ころがしの大玉のサイズほどになると、どこか遠くから水の流れる音が聞こえてきた。ぼくはまだ、湯船に向かっていて、その音をただ茫然と聞いていた。

やがて近くなってきたその音は、大量の水という形で正体を現し

た。真つ黒の穴の中から大量の水が流れてきたのである。前方からいきなり現れた洪水にぼくは当然のように流される。百八十度回転し、流されて、先ほど入ってきたガラスの扉も通過する。通過するとそこからは滑り台のようになっていて、ぼくはどんどん流された。液体の感触はするのに、水の冷たさはひとつも感じられない。その矛盾に、少し気持ち悪さを感じながらも、ぼくはやっぱり流された。今まで色を忘れていた周りの背景が、急に水色になったかと思うと、それは水そのものだった。プールの中のようなだった。でも壁はない。後方からはもちろんのこと、左右から、斜め後ろから、上方から、そして、前から。どんどん水が流れてくる。やがてその色が黄色に変わったり、赤に変わったり、紫に変わったり、いろいろな色に変わりだした。

原色と液体の世界だった。それと、ぼく。

スピードはまさに滑り台を降りるようなくらいで、でもお尻を痛めることはなく、すいすい、すいすい。

ふいに下の台がなくなった。ぼくは宙に投げ出された。反動で少し上方にあがり、そのまま落下した。

落下する際も、液体が流れている。ぼくと同じ速さで落ちていくものもあれば、速いものも遅いものもあった。

底はあった。それも水だった。プールに飛び込んだような感じではしゃんと大きな音を立てて、ぼくはそこに立っていた。信じられないことにそこは周りすべてが液体だった。ぼくは息をしている。目も見える。音も聞こえる。

音？

そういえばさっきから、誰かの声が聞こえている気がする。そうだ、これは誰かの声だ。どうして今まで気付かなかったのだろう。

ぼくは歩きだし、その音に耳をすませた。

「電車が遅れております。お乗りになるお客様は落ち着いて、奥の方へつめてください」

事故でもあったのだろうか。そんな呑気なことを一瞬考える。そ

してここが、電車のホームであることにやっと思はくは気がついた。右にも、左にも、電車の通る線路があった。外なのか、中なのか、分からない。一体何をもって外だとか中だとか言うのだろうか。相変わらずぼくは一人で、電車を待った。電車の音が近づいてくる。そしてその音が一段と大きくなったと思ったら、オレンジの車体の電車が目の前に現れた。

「発車します」

ドアが開いたと思ったら、もうそんなことを言っている。ぼくは慌てて飛び乗った。ぼくのその姿を見られたのだろう、

「駆け込み乗車は非常に危険なので行わないでください」

そんな声が今度は車内で聞こえた。

29

寒さで目が覚める。布団の暖かさを味わいながら時計をみると時刻は八時すぎ。トイレに行きたくなったのでうだうだすることもなくすぐに起きあがった。

階下では人の声が聞こえた。トイレを済まし居間に入ると、テーブルの上に朝食が用意されていた。恒太郎はそれを数秒眺めていた。「お父さんが仕事だったから」

母が恒太郎に言った。うん、と頷き恒太郎は椅子に座り、それを食べ始めた。味噌汁、ご飯、昆布、卵焼き、魚。朝食にパン以外を食べるのは久しぶりだった。

「おいしい」

母はテレビを見ていて答えない。いや、答えなくていい発言とみなされたのだろう。

たまにはごはんもいいな。そう思って、ひたすら食べ続けた。

「今日は何時に出ていくの？」

「昼食べたら行く」と思う

「そう」

「今日は何か予定あるの？」

「んー、電気屋に行こうと思ってる」母は忙しそうに答える。

「ふーん」

「行く？」

「行く」

「ご飯を食べ終わると歯を磨き、着替えた。そして部屋に戻り、またベッドに寝転んだ。気持ちがいい。これが一番気持ちがいい。本棚から昔読んだ漫画を取り出し、読み始めた。くだらない漫画で、笑いがもれた。」

恒太郎が漫画に夢中になっている間に、兄が部屋にやってきてCDを持っていった。恒太郎は適当な返事を返した。

二時間は一気に過ぎた。恒太郎はベッドからおり、階下をのぞくと、母が用意していた。出かける用意である。電気屋は十時からだった。

恒太郎は自然に登場し、一緒に玄関から出た。母の車は真っ白の軽自動車だった。母は白が好きなのである。なんで白が好きなのだろうと、他の人に対してなら思うところなのだが、母に関してはもう当たり前になっていて、改めて考えることもなかった。

道は空いていて、二十分ほどで目的地に到着した。

恒太郎は昔から電気屋が好きだった。入るとやけにものが多い印象を受ける。端のほうにはやたら明るい電気売り場。それぞれの売り場にそれぞれの家電が大量に置かれているのが好きだ。日常生活ではこんな場面は目にしないのだ。冷蔵庫が十何台も置いてあるところなんてないのだ。

母とは入口で別れ、恒太郎は店内を適当に歩いた。まずは音楽プレーヤーのコーナーに向かう。最新のものにはどういったものがあるのかを頭に入れる。これは大変に楽しい作業であった。

次はパソコンの売り場である。これも恒太郎にはたまらないときだった。恒太郎はいろんなカタログに目を通し、自分のもっていない知識を頭に入れておく。こういったものを大学で専門としている

わけではなかったし、専門にしたいとも思っていないのだが、興味は多分にあった。これは趣味というやつだろうか。未だにはかりかねている。

熱心にカタログを読んでいると、突然後ろから肩を叩かれた。しかも強い力で。振り返ると、そこには懐かしい顔がいた。

「え、何なにー。内田！ え、何してんの」

そう声を出したのはぼくだ。

「何って見てわかるだろおめー。こりこり」

内田こと内田直志は自分の着ている電気屋の制服を示す。そうか、彼はこの店に就職したのか。そう言えばそんな話を聞いたような気もする。

「帰ってきてるのか」

「ああ、週末でもたまに帰ってきたりしてるんだ」

今日が特に大きな休みではなかったから、そう言った。

恒太郎は久しぶりの友人の再会に気持ち晴れてきた。そうか、こいつは確かに友人だ。

直志は相変わらずのにやにや笑いで恒太郎の肩を小突く。

「今度飲みに行こうや」

それには恒太郎も大賛成で、大きく頷く。

「ああ」

直志はパソコンの説明と称し恒太郎とぺちやくちやおしゃべりをしていった。いや実際、パソコンの話もしていたのだけだ。

30

液体世界のホームからぎりぎり飛び乗った電車の中は乾いていた。水がない。普通の電車である。ボックス席になっており、ぼくはドアに近い席に適当に座った。周りに人は一人もいない。この車両にはぼく一人だけが乗っていた。

電車が動き出した。運転手が行き先案内をしている。しかしそれ

はぼくには聞き取れなかった。それにそんなことはどうでもよかった。

窓の外を眺めていると、その景色はホームからいきなり星空に変わった。まるで宇宙旅行のようだった。星がやたらと近い。そのせいか、ぼくにはその一つひとつがそれほどこれいには見えなかった。ただの巨大の石。地面。しかし、現実的でないその気配は神秘的であり、感動はしている。

景色は変わっていった。基本は宇宙の星空なのだが、その中をゾウのパレードが通ったり、マラソン選手が走って行ったりもした。みんなに共通しているのは、走ったり歩いたりしているということだ。みんなどこかに向かって進んでいる。

ふと、車内が暗いことに気付く。外のアマリの明るさに、その暗さは一層際立っていた。そこにぼくは一人座って、遠くの人々を眺めていた。

隣の車両からは人の声がした。大勢の人が騒ぐ声。お酒でも飲んでいるのか、何かのゲームをしているのか、分からないがとにかく楽しい音が聞こえてくる。がやがや。がやがや。

なのに、ぼくの車両は暗く、ぼくは一人で、なんとなく寒い。空気が青い。

ブルーか。ブルーなのか。

しかし電車は進み続ける。ぼくが何を考えていようと関係がないのだろう。そしていつかこの電車はとまる。ぼくはいつかこの電車から降りる。それは決まっている事実のはずなのだ。今、不安でも何とかなる。ぼくにも未来はあるはずだった。

帰りの電車内。恒太郎はやたらと時間が長く感じた。やはりやることがない。やることがないことを意識することが異様に多い。二時間。無駄な時間が嫌いなはずなのに、何も持続させることができ

ないのは悲しい事実だった。

あと九十分。

あと八十三分。

あと、八十一分。

恒太郎は電車内の人々の顔を見てみる。しかし、他の人が何を考えているかなどと、本当は興味がなかった。それを自分が考えるのが好きなだけである。本当は他人のことになどあまり興味はないのだ。

アパートに帰ればあとは寝るだけだ。寝てしまえばもう次は月曜日だし、授業がある。そうすると、また今週のような時間を過ごす何か変わっただろうか。いや何も変わっていない。自分はきつと来週も同じように過ごすのだろうし、たとえば十年前の自分でさえもそうは変わらないのだと思う。

揺れを感じるのを楽ししいし、流れていく看板を読んでいくのも楽しかった。それは言葉にしてしまえばそれだけのことで、でもそれだけのことが大事だと自分は思っている。

言葉にして、思い浮かべること。それを誰かに伝えられなくても、最低限、自分を保っていたい。好きなものも明確にしたいし、自分の性格は自分がよく知っていたい。それが無理だと悟るのは絶対に嫌だった。

恒太郎は悩んでなどいない。これが悩みなどと言える事柄は一つもなかった。これが日常なのだ。自分の好きな世界と共存して生きる。これが自分の今のすべてなのだ。現実だけがすべてではない。

勉強は楽しい。大学に入ってよかったとよく思うことがある。学ぶことは、いろいろなものを越えた快感があった。その瞬間を味わうためにも、自分の進んだ道は間違いではないのだ。たとえ自分がそう思うことを拒絶したところで、それは矛盾した気持ちで、偽りの気持ちなのだ。

いやだ。

言葉にできない思考がある。いやだった。

向かいの席に座っている若い男。革のパンツをはいて、チクチクのついたジャケットを着ている。ああいう男もいやだ。

その隣にいる女子。タイツが紫である。いやだ。

その隣にいるおじさん。太っている。いやだ。

いやなのだ。簡単に、簡潔に表せる言葉はこれなのだ。だけどそれを言えば人は自分を決めつける。それも、いやだった。

もっと柔軟に生きられないのか？

それは自分にも言えることなのに。

恒太郎には、実際の行動で迷うことはあまりなかった。

32

ゆっくりと減速していく電車。うとうとしかけていたぼくははつと目を覚まし、窓の外を見た。それはあまりにも見慣れた景色。ぼくのアパートの最寄り駅だった。

「電車が到着します。白線の内側でお待ちください」

なぜかぼくの頭の中では駅のホームでの案内放送が流れていたが、ぼくはそれに流されるように電車の降り口に向かった。

電車を降りると、階段を降り、もう一度登り、改札を通った。そこは確かに見たことのある道だったが、この間見たときとはほんの少しだけ違っているようにも思う。

ぼくは駐輪場に向かい、自分の自転車を見つけける。それは前回ここに止めたときとまったく変わらずにそこに佇んでいた。

そうか。

自転車にまたがり、迷いもなく道を選択して、とにかく漕いだ。時間にしてたったの十分だが、ぼくの中で時間は流れていない。

アパートが見えた。相変わらずなかなか古い建物である。ポストを確認するが、何も来ていなかった。ぼくは二階の自分の部屋の前まで行き、鍵を取り出して開け、中に入った。

寒いなあ。

急いでホットカーペットのスイッチを入れる。うがいを済ませ、軽く着替えた。そのまま冷蔵庫を確認した。そこには当然のように食材が山盛り入っていた。

何をつくるのか。

今ぼくが考えているのは魚料理と肉料理。どちらがいいだろうか。魚、肉。どちらも好きである。どちらかというと魚の方が好きだが、今日の朝食べたというのもある。

とりあえず白菜とかまぼことしいたけで雑煮をつくることにする。急に思いついたのだ。雑煮。ゾウニ。餅も確かあったはずだ。

ふと、窓の外に見える家のことを考えた。彼は元気にしているだろうか。ぼくがないで食べていけているだろうか。楽しくやっているだろうか。映画は完成しただろうか。

そして、机の上に出しっぱなしになったままの写真をみる。それはこのあいだの旅行でのものだった。橋本が自分でとった写真をぼくにも焼き増ししてくれたのだ。くだらないものから、きれいな滝までとっていて、写真は見ていて楽しかった。

今日ずっと持っていた鞆をさつき置いたところから自分のところへ引き寄せた。床にティッシュを敷き、中身をぶちまける。びしゃびしゃに濡れていた。

「仕方がないな」

それを見て少しだけ笑う。

「そうだ、雑煮を作るんだった」

ぼくは立ち上がり、台所へ向かった。

33

洗面所の鏡に映った恒太郎の顔は無表情だった。その顔のまま歯を磨く。それが終わると、床においてあった半纏を着、カーペットの上に座り、つけたままの腕時計を外して机に置いた。その時計が示すには、今の時刻は午後八時らしい。帰宅してからもうだいぶた

っている。帰りにどこかによってこればよかった。どうせやることがないのだから。

机に頬を乗せる。気持ちがよかった。目の先が机に当たっている。恒太郎は少し意識した。

こたつ布団にもぐりこんで、横になった。全身が暖かった。

乾ききっている。涙など出ようはずがない。恒太郎が一週間に流す涙はゼロだった。

ぼくはいつも我に返っている。我だ。芹沢さんと話すべくもぼくだし、千博と、大水と、橋本と、ミドリと話すべくも、ぼくだ。

恒太郎の世界は広がっている。たとえ空想でも、虚しさを抑えるのにそれは十分に機能していた。空想でもこの程度だし、ときどきさらに虚しくなるのだが、やめられなかった。恒太郎は物心がついたときから同じような空想をしていた。芹沢さんとはその時からの付き合いなのだった。

いない。変な夫婦も、千博という女も、幼馴染たちも、空飛ぶ世界も、液体天国も、ない。女のぼくも、いない。

恒太郎には悩みなどない。これが恒太郎の日常なのだ。

明日からまた、月曜日が始まる。

34

となりの部屋がやけに騒がしい。ぼくは布団の中から何があったのだろうと想像をはたらかせてみるが、何も思いつかない。まだ起きたばかりの頭で、うまくはたらかないのだった。

隣の部屋に住んでいるのは、見た目は無表情だが中身はすごぶる怖いフリーターだった。そして今聞こえる外の音からして、誰かが彼を怒らしているのは確実だった。そんな命知らずもいるのかと、ぼくは驚いた。

しばらくすると騒ぎはなくなった。その終わりに、一番激しい怒

号を聞いたような気がしたのは気のせいだったか。

そしてすぐにぼくの部屋のチャイムの音が聞こえた。

「？」

先ほどの騒ぎと何か関係があるのだろうか。面倒なことはたくさんだな。そうぼくは思ったが、どうせここは空想の世界なのだから、思い切って玄関の扉を開けた。そこに立っていたのは、上品なスーツを着た、俳優みたいな顔をした男だった。

「な、何でしょうか」

ぼくはひるみながら答える。

すると彼はよどみなくぼくにこう言ったのだ。

「あなたの腕を見込んでお願いします。どうか僕に昼食を作ってくださいませんか」

これがぼくと芹沢さんとの出会い。

恒太郎は意識を授業へ戻す。そして想像した。

芹沢さんが女のぼくを見たらなんと言うのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8779x/>

---

ぼく一人

2011年10月24日02時02分発行